

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第242集

入間郡毛呂山町

まま上遺跡

葛川放水路建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告

2001

埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



遺跡全景



第5c号住居跡遺物出土状況



第5c号住居跡



第5c号住居跡出土土器近景



第5c号住居跡出土土器



文様展開写真

発刊に寄せて

21世紀を迎え、我が国は、少子・高齢化の進行に伴う教育・福祉問題、都市化の進展に伴う環境問題、バブル経済崩壊後の財政問題など、様々な課題を抱えております。

本県では、こうした社会経済情勢の諸課題に的確に対応し、県民一人ひとりが真の豊かさを実感できる「豊かな彩の国」を実現するため、「環境優先」「生活重視」の基本理念のもと、計画的な県政の推進に努めております。

なかでも治水対策は、県民の皆様の尊い生命・財産を守り、安全で安心して生活できる住環境を整備する上で必要不可欠なものです。

また、急激な都市化の進展により、人々にうるおいや安らぎを与える緑地空間が減少したこともあり、近年、河川の持つ豊かな水辺空間がそれを補完する場として注目されております。

このため、自然環境の保全・復元も視野に入れた治水対策が求められているところであり、私はこのような県民の皆様のニーズに応えるため、「災害に強いまちづくり」とともに「自然や人にやさしい川づくり」にも全力で取り組んでいるところでございます。

葛川は入間台地の豊かな自然が残る毛呂山町、坂戸市を流れる河川ですが、流域ではたびたび浸水被害が発生しております。このため、県では葛川の洪水を高麗川に分流する放水路の建設を進めているところでです。

こうした河川の流域には、先人たちの足跡が多く見られます。毛呂山町における葛川放水路の建設箇所は、以前から「まま上遺跡」として知られており、工事に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしましたところ、竪穴式住居跡や土器などが発見されました。この報告書は、その調査結果をまとめたものでございます。県民の皆様の教育・文化の向上のために御活用いただければ幸いです。

平成13年2月

埼玉県知事

土屋 幹彦

序

首都圏に位置する埼玉県は、急激な人口増加と、県南部への人口集中により、都市問題が生じていることから、道路、下水道、公園、河川などの基礎的な生活基盤の整備が重要な課題となっています。

県西部地域においても、都市化の波とともに丘陵地の開発や、低地への住宅進出などの変化が見られ、災害のありかたも複雑かつ多様化してまいりました。特に、山林の伐採や農地の宅地化などは、自然の治水力である洪水調節能力の著しい低下をもたらし、中小河川において水害の発生しやすい状況をつくりだしています。

丘陵の裾野に端を発する葛川もそのひとつで、越辺川へと流れ込む小河川であります。上流地域で多く降った雨水を高麗川へと流し込むための放水路の建設が計画されましたが、毛呂山町まま上地区内で埋蔵文化財の包蔵地が確認されました。

これらの埋蔵文化財の取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が各関係機関と慎重に協議を重ねた結果、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、当事業団が河川課の委託を受け、発掘調査を実施することとなりました。

その結果、縄文時代中期の貴重な集落跡を発見することができました。その成果をまとめたものが、本書であります。往時の生活の一端がしのばれるとともに、本書が埋蔵文化財の保護、教育普及さらには学術研究の資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県土木部河川課、飯能土木事務所、毛呂山町教育委員会、並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成13年1月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野 健一

例言

1. 本書は、埼玉県入間郡毛呂山町に所在するまます遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略称と代表地番、および発掘調査届に対する指示通知は、以下の通りである。
遺跡名称
まます遺跡 (MMUE)
所在地
埼玉県入間郡毛呂山町大字西大久保字まます
800番地-2他
指示通知
平成11年7月23日付け教文第2-57号
3. 発掘調査は、葛川放水路建設工事に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整のもと、埼玉県土木部河川課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。
5. 発掘調査は、中村倉司・西井幸雄が担当し、平成11年7月1日から平成11年9月30日まで実施した。
6. 遺跡の基準点測量は、株式会社ムサシノに委託した。土器展開写真は、小川忠博氏に委託した。
7. 発掘調査における写真撮影は、中村倉司、西井幸雄が行い、遺物写真の撮影は大塚道則、金子直行が行った。
8. 出土品の整理および図版の作成は、石器を上野真由美、その他を中嶋淳子の協力を得て金子直行が行った。
9. 本書の執筆はI-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、それ以外を金子が行った。
10. 本書の編集は、金子が担当した。
11. 本書に掲載した資料は平成13年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
12. 本書の作成にあたり以下の機関・諸氏からご教示・ご指導を賜った。記して、感謝の意を表します。(敬称略)
毛呂山町教育委員会 橋澤道博
会田 進 石塚和則 熊澤孝之 谷井彪 富元久美子
中平 薫 賢田 明 松本尚也 宮崎朝雄 柳戸信吾

凡例

1. 本書挿図中におけるX・Yの座標数値は、国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒)に基づく各座標値を示す。また、各挿図における方位は、すべて座標北を表す。
 2. 遺跡におけるグリッドの設置は、国家標準直角座標に基づいて設置しており、10m×10mの方眼である。
 3. グリッドの名称は、北西杭を基準として、東西方向西から東へ1～、南北方向北から南へA～、と番号を付けている。
 4. 挿図の縮尺は、各図版中に指示した。
全体図1/400
1/300
遺構図1/60
- 遺物
- | | |
|----------------|-----|
| 縄文土器 | 1/4 |
| 土器拓本・石器 | 1/3 |
| 土師器・瓦質土器 | 1/4 |
5. 遺構の表記記号は、以下のとおりである。
S J・・・住居跡 S B・・・掘立柱建物跡
S D・・・溝跡 S K・・・土壇
 6. 遺構図断面に表記した水準の数値は、海拔標高である。
 7. 本書に使用した地図は、建設省国土地理院発行の1/25000を、また、毛呂山町発行の1/2500、1/10000を使用した。

目次

口絵

発刊に寄せて

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	3 集石土壌	76
1 発掘調査に至る経過	1	4 土壌	81
2 発掘調査・報告書作成の経過	2	5 埋婁	103
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	3	6 土器集中区	104
II 遺跡の立地と環境	4	7 溝	104
III 遺跡の概要	8	8 ビット状遺構	109
IV 遺構と出土遺物	14	9 グリッド出土遺物	138
1 住居跡	14	V 発掘の成果と提起する諸問題	146
2 掘立柱建物跡	69		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	4	第16図 第2号住居跡出土遺物 (3)	25
第2図 周辺の遺跡 (縄文・弥生時代)	5	第17図 第2号住居跡出土遺物 (4)	26
第3図 周辺の遺跡 (古墳・奈良・平安時代)	6	第18図 第2号住居跡出土遺物 (5)	27
第4図 遺跡周辺の地形図 (1)	9	第19図 第2号住居跡出土遺物 (6)	29
第5図 遺跡周辺の地形図 (2)	10	第20図 第2号住居跡出土遺物 (7)	30
第6図 遺構配置図	11	第21図 第3号・第4号住居跡	32
第7図 調査区全体図	12	第22図 第3号・第4号住居跡出土遺物 (1)	33
第8図 第1号住居跡	15	第23図 第4号住居跡出土遺物 (2)	34
第9図 第1号住居跡出土遺物 (1)	16	第24図 第5号住居跡	36
第10図 第1号住居跡出土遺物 (2)	17	第25図 第5号住居跡遺物出土状況	37
第11図 第1号住居跡出土遺物 (3)	18	第26図 第5 a 号住居跡	38
第12図 第1号住居跡出土遺物 (4)	19	第27図 第5 b 号住居跡	39
第13図 第2号住居跡	21	第28図 第5 c 号住居跡	40
第14図 第2号住居跡出土遺物 (1)	22	第29図 第5号住居跡出土遺物 (1)	43
第15図 第2号住居跡出土遺物 (2)	23	第30図 第5号住居跡出土遺物 (2)	44

第31図	第5号住居跡出土遺物 (3)	45	第67図	土壌出土遺物 (4)	98
第32図	第5号住居跡出土遺物 (4)	46	第68図	土壌 (7)	99
第33図	第5号住居跡出土遺物 (5)	47	第69図	第1号埋壘・第1号土器集中区	103
第34図	第5号住居跡出土遺物 (6)	48	第70図	溝 (1)	105
第35図	第5号住居跡出土遺物 (7)	49	第71図	溝 (2)	106
第36図	第5号住居跡出土遺物 (8)	51	第72図	溝 (3)	107
第37図	第5号住居跡出土遺物 (9)	52	第73図	溝出土遺物	108
第38図	第5号住居跡出土遺物 (10)	53	第74図	ビット状遺構 (1)	110
第39図	第5号住居跡出土遺物 (11)	54	第75図	ビット状遺構 (2)	111
第40図	第5号住居跡出土遺物 (12)	57	第76図	ビット状遺構 (3)	112
第41図	第5号住居跡出土遺物 (13)	58	第77図	ビット状遺構 (4)	113
第42図	第5号住居跡出土遺物 (14)	60	第78図	ビット状遺構 (5)	114
第43図	第5号住居跡出土遺物 (15)	62	第79図	ビット状遺構 (6)	115
第44図	第5号住居跡出土遺物 (16)	63	第80図	ビット状遺構 (7)	116
第45図	第5号住居跡出土遺物 (17)	64	第81図	ビット状遺構 (8)	117
第46図	第5号住居跡出土遺物 (18)	65	第82図	ビット状遺構 (9)	118
第47図	第6号住居跡	66	第83図	ビット状遺構 (10)	119
第48図	第6号住居跡出土遺物	67	第84図	ビット状遺構 (11)	120
第49図	第1号・第2号掘立柱建物跡	70	第85図	ビット状遺構 (12)	121
第50図	第3号掘立柱建物跡	71	第86図	ビット状遺構 (13)	122
第51図	第4号掘立柱建物跡	72	第87図	ビット状遺構 (14)	123
第52図	第5号・第8号掘立柱建物跡	73	第88図	ビット状遺構 (15)	124
第53図	第6号掘立柱建物跡	74	第89図	ビット状遺構 (16)	125
第54図	第7号掘立柱建物跡	75	第90図	ビット状遺構 (17)	126
第55図	集石土壌 (1)	77	第91図	ビット状遺構 (18)	127
第56図	集石土壌 (2)	78	第92図	ビット状遺構 (19)	128
第57図	集石土壌出土遺物	79	第93図	ビット状遺構 (20)	129
第58図	土壌 (1)	82	第94図	ビット状遺構 (21)	130
第59図	土壌出土遺物 (1)	83	第95図	ビット状遺構 (22)	131
第60図	土壌 (2)	87	第96図	ビット状遺構 (23)	132
第61図	土壌 (3)	88	第97図	ビット状遺構 (24)	133
第62図	土壌出土遺物 (2)	89	第98図	グリッド出土土器 (1)	139
第63図	土壌 (4)	91	第99図	グリッド出土土器 (2)	140
第64図	土壌 (5)	92	第100図	グリッド出土土器 (3)	141
第65図	土壌出土遺物 (3)	93	第101図	グリッド出土土器 (1)	144
第66図	土壌 (6)	97	第102図	グリッド出土土器 (2)	145

図版目次

- 図版1 遺跡全景（西から）
遺跡全景（東から）
- 図版2 第1号住居跡全景
第1号住居跡炉跡
- 図版3 第2号住居跡全景
第3号住居跡全景
- 図版4 第1～3号住居跡
第4号住居跡全景
- 図版5 第5号住居跡全景
第5a号住居跡炉跡
- 図版6 第5c号住居跡全景
第5c号住居跡炉跡
- 図版7 集石土壇
- 図版8 掘立柱建物跡・溝・第1号土器集中区
- 図版9 住居跡出土土器（1）
- 図版10 住居跡出土土器（2）
- 図版11 住居跡出土土器（3）
- 図版12 第1号住居跡出土土器（1）
第1号住居跡出土土器（2）
- 図版13 第2号住居跡出土土器（1）
第2号住居跡出土土器（2）
- 図版14 第2号住居跡出土土器（3）
第2号住居跡出土土器（4）
- 図版15 第2号住居跡出土土器（5）
第2号住居跡出土土器（6）
- 図版16 第2号住居跡出土土器
第4号住居跡出土土器
- 図版17 第5号住居跡出土土器（1）
第5号住居跡出土土器（2）
- 図版18 第5号住居跡出土土器（3）
第5号住居跡出土土器（4）
- 図版19 第5号住居跡出土土器（5）
第5号住居跡出土土器（6）
- 図版20 第5号住居跡出土土器（7）
第5号住居跡出土土器（8）
- 図版21 第5号住居跡出土土器（9）
第5号住居跡出土土器（1）
- 図版22 第5号住居跡出土土器（2）
第6号住居跡出土土器
- 図版23 土壇出土土器
グリッド出土土器（1）
- 図版24 グリッド出土土器（2）
グリッド出土土器（3）
- 図版25 土器展開写真（1）
- 図版26 土器展開写真（2）

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

埼玉県では、人口と産業の集中に伴って、各地域で都市化が進展するとともに、西部地域の丘陵地の開発も進み、災害の態様も複雑・多様化している。例えば、農地や林地の宅地化による自然の洪水調節機能の低下によって、少量の降雨でも水害が発生しやすくなり、さらに浸水しやすい地域も宅地となってきているため、河川の氾濫による被害が増大する可能性が高まっている。そのため、埼玉県では河川の改修等の治水対策を積極的に進め、浸水被害等の軽減を図り、安心して暮らせるまちづくりを推進しているところである。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような各種開発事業に対応するため、開発部局と事前協議を行って、文化財の保護と開発事業との調整を進めているところである。

越辺川に注ぐ葛川では、上流地域で多く降った雨水等を高麗川に流しこむための放水路が計画され、埋蔵文化財の所在および取り扱いについて、埼玉県飯能土木事務所長から文化財保護課長へ、平成10年7月9日付け飯土第653号で照会があった。

これに対し、文化財保護課では平成10年7月16日及び10月7日に試掘調査を行ったところ、埋蔵文化財を確認し、それぞれ平成10年8月12日付け教文620号、及び平成10年10月17日付け教文第897号で飯能土木事務所長へ次のとおり回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称 (No)	種別	時代	所在地
まます遺跡 (No.26-056)	集落跡	縄文 平安	毛呂山町大字西大 久保字まます地内

2 取り扱いについて

現状保存が望ましいが、工事計画やむを得ず上記の埋蔵文化財包蔵地の現状を変更する場合には、事前に文化財保護法第57条の3の規定による発掘通知を文化庁長官へ提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。発掘調査については、文化財保護課と協議してください。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、埼玉県土木部河川課、文化財保護課の三者で調整協議を行い、平成11年7月1日から9月30日まで実施することとなった。

文化財保護法第57条の3の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、同法第57条1項の規定に基づく発掘調査届が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、発掘調査が実施された。

なお、発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの通知番号は、平成11年7月23日付け教文第2-57号である。

(文化財保護課)

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は平成11年7月1日から平成11年9月30日まで実施した。

7月初旬、発掘調査の準備を進め、重機による表土掘削を開始する。表土除去後は、人力で掘削面を精査し、遺構確認を行った。

基準点測量は7月の初旬に行い、表土除去と同時進行で遺跡を包囲するようにグリッドを設定する。

掘削面の精査中に出土した遺物に対しては、写真撮影を行った後にグリッド遺物として取り上げたが、遺構に伴うものは出土位置がわかるように記録した。

7月中頃から遺構を掘り出し、8月から9月中頃にかけて縄文時代の竪穴住居跡を中心にして調査を進めたが、中・近世遺構の小穴(ピット)が多く、縄文時代のピットとの区別を明らかにしながら調査を進めるのに苦労した。

9月の中旬には大方の調査を終了し、9月の下旬までに図面関係を終了させ、調査区全体を清掃し、写真撮影を行った。

9月末には、発掘調査を全て終了し、発掘機材などを片付け、調査事務所を撤収した。

(2) 整理・報告書作成

整理作業は平成12年7月1日から平成12年12月31日まで実施した。

7月上旬から遺物の水洗・注記を行い、同時に図面・写真の整理を行った。

遺物の復元は、7月から10月にかけて接合などの作業と同時進行したが、器形を復元できる個体が多く、多くの時間を割いた。

復元された遺物は、順次図化を行い、トレースなどの墨入れを行った。

遺構の図面整理は、7月初旬から行ったが、中・近世以降の細かなピットを処理するのに時間を割いた。

遺構図は11月の中旬よりトレースを行い、版組みも同時進行で行った。

12月の中旬に遺物の写真撮影を行い、12月末には報告書の割付けを終了させる。

原稿は、12月の中旬より執筆を開始し、1月の中旬に終了させた。

報告書は、1月中旬より校正を開始し、2月中旬までに校正を終え、2月末日に印刷を終了して、刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査（平成11年度）

理 事 長 荒井 桂
副 理 事 長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

副部長兼経理課長 関野 栄一
主 任 福田 昭美
主 任 腰塚 雄二
主 任 菊池 久
庶務課長 金子 隆
主 査 田中 裕二
主 任 江田 和美
主 任 長滝 美智子

調査部

調査部長 増田 逸朗
調査部副部長 水村 孝行
主席調査員 杉崎 茂樹
(調査第二担当)
統括調査員 中村 倉司
統括調査員 西井 幸雄

(2) 整理作業（平成12年度）

理 事 長 中野 健一
副 理 事 長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

副 部 長 関野 栄一
主 席(庶務担当) 阿部 正浩
主 席(施設担当) 野中 廣幸
主 任 菊池 久
主 席(経理担当) 江田 和美
主 任 長滝 美智子
主 任 福田 昭美
主 任 腰塚 雄二

調査部

調査部長 高橋 一夫
資料副部長 鈴木 敏昭
主席調査員(資料整理担当) 磯崎 一
統括調査員 金子 直行

II 遺跡の立地と環境

まま上遺跡は、埼玉県入間郡毛呂山町大字西大久保字まま上800番地-2他に所在し、東武越生線川角駅から北北東方向へ約2km程の地点に位置する。

遺跡の所在する毛呂山町は、関東平野と関東山地が接する位置にあり、町中央部を南北方向に走る八王子-高崎構造線を境にして西側に山地部、東側に丘陵・台地部が広がっている。町の北側には岩殿丘陵が、南側には毛呂山丘陵がそれぞれ東西方向に発達し、毛呂山丘陵上部には薄く多摩ロームを乗せている。

この二つの丘陵の間には越辺川の扇状地が形成され、その上に関東ローム層を乗せ、毛呂台地と呼ばれる入間台地の一部を構成するローム台地が形成されている。台地内は越辺川とその支流である毛呂川、阿諏訪川、大谷木川、葛川が、南側の町境に高麗川とその支流である宿谷川が東流し、何筋かの東西方向に細長い標高80mから40m前後を測る西高東低の台地に開析されている。各河川沿いには小段丘と、輻状の沖積地である低地面が形成され、これ等の谷筋と台地上に

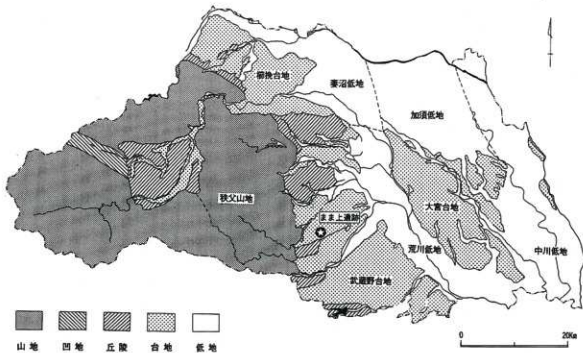
集落が営まれている。

まま上遺跡はこの毛呂台地南東部の坂戸市境に位置し、高麗川と葛川に開析された東西に細長い台地上で、高麗川左岸、葛川右岸の標高約43m程の平坦な段丘状台地縁に沿って立地する。遺跡の北側を流れる葛川は、小さく蛇行しながらも直線的に東流し、坂戸市内で越辺川と合流する。越辺川は、その後川島町で入間川と出会い、南流して大河荒川と合流する。

葛川沿いには小さな沖積地が、また、高麗川沿いにも沖積地が形成されており、遺跡の乗る台地はこの沖積面から約6m程の比高差を測る。遺跡は南北約400mの範囲を持ち、一部は坂戸市内にも広がっているものと思われる。

毛呂山町は東に坂戸市、西に飯能市、南に日高市、北に越生町、鳩山町と接しており、丘陵や河川で区切られる部分が多いが、台地続きの坂戸市とは両市にまたがる遺跡が存在する。

毛呂山町内では、河川や台地縁に沿って遺跡の分



第2図 周辺の遺跡（縄文・弥生時代）



- 【毛呂山町】** 1. まま上(前・中) 2. 上 3. 築地(中) 4. 仏坂(中) 5. 大利原(中) 6. 延命寺北(中) 7. 西原 8. 上殿(中) 9. 表B(中) 10. 旭台南 11. 山田(前) 12. 蟹ヶ沢(中) 13. 塚場山 14. 後原(中) 15. 本社(中) 16. 下中尾(早・前・中・弥) 17. 山ノ神(前) 18. 新田東(中) 19. 宮ノ腰 20. 宮ノ前 21. 西ノ前(早・中・後) 22. 大寺(中) 23. 三角南(早・中) 24. 臥龍山 25. 馬場(中) 26. 堀込(中) 27. 中野(中) 28. 古宮(後) 29. 錫女野北(中) 30. 錫女野 31. 総庭 32. 五反田(中) 33. 伊勢原 34. 小川林(中) 35. 沢田B(中) 36. 重殿(中) 37. 中在家(中・弥) 38. 白陵(中) 39. 八反田(前) 40. 苗木原 41. 大満山B 42. 金谷(前) 43. 大満山A 44. 西戸西原(前) 45. 愛宕下(中) 46. 松の外(前・後) 47. 久根下 48. 稲荷台 49. 立掘 50. 前原 51. 神明台(後) **【越生町】** 52. 紫尾根(中・後) **【坂戸市】** 53. 中耕(早・前・中) 54. 足洗(後) 55. 稲荷前(弥) 56. 塚の越(中・弥) 57. 上浅羽(弥) 58. 城山(中) **【龍ヶ島市】** 59. 愛宕

第3図 周辺の遺跡（古墳・奈良・平安時代）



- 毛呂山古墳** 1. まま上(奈・平) 2. 築地(古・奈・平) 3. 仏坂(平) 4. 大利原(平) 5. 満願寺南(奈・平) 6. 船原前(平)
 7. 表A(平) 8. 表B(奈・平) 9. 宮脇(平) 10. 延命寺北(平) 11. 西原(平) 12. 矢鳥(古) 13. 旭台南(奈) 14. 塚
 場山(古) 15. 本社(古・奈・平) 16. 中尾(平) 17. 東原(平) 18. 毛呂氏館跡(中世) 19. 伴六(平) 20. 斎藤氏館跡
 (中世) 21. 村田和泉守館跡(中世) 22. 総庭(平) 23. 川角古墳群(古) 24. 八反田(古) 25. 苗木原(古・平) 26. 鎌倉
 道(中世) 27. 西ヶ谷北(古) 28. 立堀(平) 29. 大類古墳群(古) 30. 東側(奈・平) 31. 大類氏館跡(中世) 32. 大類
 古墳群(古) 33. 大類古墳群(古) 34. 神明台(平) 35. 宿浦(古) 36. 堂山下(古) 37. 稲荷台(平) 38. 川角古墳群
 (古) 39. 崇徳寺跡(中世) 40. 久根下(古・平) 41. 清後坂(平) 42. 松の外(平) 43. 西戸丸山(奈) 44. 西戸古墳群
 (古) 45. 金谷(奈・平) 46. 立沢(奈・平) **越生町** 47. 大鶴塚古墳(古・中世) **山田町** 48. 十郎横穴墓群(古) **坂戸町** 49.
 中耕(古) 50. 広面(古) 51. 桑原(古) 52. 棚田(古) 53. 稲荷前(古・奈・平) 54. 足洗(古) 55. 金井B(奈・平・中世)
 56. 金井A(古・奈・平・中世) 57. 田島(古) 58. 長岡(古) 59. 若林古墳群(古) 60. 塚の越(古) 61. 三福寺古墳群
 (古) 62. 善徳寺古墳群(古) 63. 愛宕塚古墳(古) 64. 金塚古墳(古) 65. 將軍塚古墳(古) 66. 摩利支天塚(古) 67.
 大塚屋敷(中世) 68. 欠のハケ上古墳(古) 69. 塚山古墳(古) 70. 石塚塚古墳(古) 71. 清名塚古墳(古) 72. 愛宕塚
 古墳(古) 73. 坂上古墳(古) **龜ヶ島町** 74. 愛宕(古・奈・平)

布が認められる。大きくは町北東部の越辺川流域、南部の毛呂山丘陵から高麗川沿い、葛川低地沿いの三群に分けることができ、山地から台地内奥部では遺跡が少ない傾向にある。

越辺川流域では毛呂台地北縁部の段丘台地縁に立地する遺跡が多く、毛呂山丘陵では丘陵尾根や緩斜面上に、高麗川沿いでは左岸の台地上に比較的大きな集落が営まれている。また、葛川沿いでは左岸低地を南に望む毛呂台地の南縁部に多く分布する傾向にある。

まます遺跡は、これ等の遺跡群の中で、高麗川沿いの遺跡群に含まれ、葛川と高麗川の間に形成された段丘上の遺跡で、過去7回の発掘調査が行われており、縄文時代中期と、奈良・平安時代の遺跡であることが明らかにされている。

毛呂山町では詳細な遺跡分布調査が行われており、それによると、縄文時代の遺跡は68遺跡（縄文時代の遺跡は第2図参照）が確認され、遺跡全体の約6割強を占め、分布も遺跡全体の分布とはほぼ同じ傾向にあることが把握されている。

台地が多いのに比して、草創期、早期の遺跡は少なく、早期では毛呂山丘陵周辺部（21、23）と葛川左岸の毛呂台地南縁部（16）に分布し、町全体で7遺跡が確認されている。然る系土器を出土する遺跡は下谷ヶ崎遺跡のみで、他の殆どは奈良系土器群が散布している。

前期は8遺跡の大半が丘陵台地縁部に確認されており、前半期の遺跡はなく、黒沢式期（11、16、17、39、42、46）から諸磯式期（16、42、46）にかけての遺跡である。前期終末は2遺跡（1、16）で、その内の1遺跡がまます遺跡である。

中期では39遺跡が確認されており、大半が勝坂式期から加曾利E式期にかけての遺跡で、毛呂山丘陵周辺から高麗川左岸台地、越辺川右岸台地に多く分布する。勝坂式期の遺跡は18遺跡、加曾利E式期の遺跡は22遺跡確認されている。勝坂式期と加曾利E式期が複合する遺跡が多く、まます遺跡周辺での中期の主な遺跡は、築地遺跡（3）、上殿遺跡（8）、蟹ヶ沢遺跡（12）が複

合遺跡で、山田遺跡（11）が勝坂期、大利原遺跡（5）、延命寺北遺跡（6）、表B遺跡（9）が加曾利E式期である。

後期になると遺跡数が激減し、6遺跡を数えるのみとなる。その中でも、確実な後期の遺跡は称名寺式から加曾利B式期の松の外遺跡（46）と、加曾利B式期の古宮遺跡（28）で、他は土器の散布地程度である。

晩期では、殆ど遺跡が確認されていない。

弥生時代も遺跡が少なく、後期の下中尾遺跡（16）と中在家遺跡（37）が確認されているのみである。

古墳時代以降の遺跡（第3図参照）は越辺川流域や、葛川低地沿いに分布し、越辺川流域には川角（23）、犬類（29）、西戸（44）の各古墳群が分布する。苗木原遺跡（25）、宿浦遺跡（35）、久根下遺跡（40）は、これらの古墳群と関連する遺跡と考えられている。

奈良・平安時代は高麗川左岸台地や毛呂台地南縁部、越辺川左岸台地に遺跡が多く見られるようになり、台地内陸部にまで遺跡が確認されるようになる。奈良時代では5遺跡ほどの集落としての可能性のある遺跡が存在するほか、8世紀の前半にまで遡ると考えられる西戸丸山窯跡（43）や大寺廃寺がある。平安時代では39遺跡と遺跡数が増加するのが特徴的である。

その中で、まます遺跡は縄文時代中期の集落遺跡であるとともに、数少ない奈良時代の貴重な集落遺跡でもあることが確認されているのである。

参考文献

村木功1988「毛呂山町の遺跡」毛呂山町埋蔵文化財調査報告第5集

村木功1990「町内遺跡群発掘調査報告書Ⅰ」毛呂山町埋蔵文化財調査報告第7集

村木功1995「まます遺跡第2次調査・第3次調査」毛呂山町埋蔵文化財調査報告第10集

村木功1995「町内遺跡群発掘調査報告書（2）」毛呂山町埋蔵文化財調査報告第11集

富田和夫1983「伴六遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第11集

III 遺跡の概要

まます遺跡は入間郡毛呂山町大字西大久保字まます800番地-2他の、標高43m前後の台地上に所在し、範囲は南北約400m、東西約340mの規模を持ち、一部坂戸市側にまで広がるものと推定される。

遺跡の南東側は高麗川が形成した河岸段丘崖面にて区切られ、北西側は葛川によって形成された沖積地である低地面へと緩やかに移行しており、厳密な範囲は掴み難い。また、東西方向に伸びる台地上には遺跡が連続して存在するため、南西側に位置する築地遺跡や、北東側の八坂神社前遺跡との境界も明瞭にしない。それぞれの時代毎に、遺跡相互の範囲が融合離散しているものと想像される。築地遺跡はまます遺跡と同様に、縄文時代中期の勝坂式土器と加曾利E式土器が採集されており、同様相を持つ遺跡としてその存在が知られている。

まます遺跡は、毛呂山町教育委員会によって7回の発掘調査が行われており、今回の調査が第8次調査となる。第1次～第4次、第6次調査については報告が成されている。

第1次調査では平安時代の住居跡2軒と土壇2基が、第2次調査では平安時代の住居跡2軒、特殊遺構1基、土壇11基が、第3次調査では縄文時代中期の住居跡2軒、平安時代の住居跡4軒、土壇11基が、第4次調査では縄文時代中期の集石土壇3基、土壇43基、溝1条が、第6次調査では縄文時代中期の住居跡1軒、弥生時代後期の住居跡1軒、平安時代の住居跡1軒、溝1条がそれぞれ検出されている。

これまでに検出された縄文時代の遺構の細かな時期を検討すると、中期住居跡はいずれも加曾利E式期の所産であり、勝坂式期のものはない。第3次第1号住は2軒住居跡の重複関係にあるが、唐草文系のモチーフを持つ土器や、曾利系の要素を持つ加曾利E系の土器が出土しており、加曾利EⅡ式終末からEⅢ式初頭段階の範囲に収まると考えられる。第2号住は炉跡のみ現存するが、炉体土器として連弘文土器が使用さ

れ、加曾利EⅡ式後半段階に位置付けられる。第6次調査の第4号住は、縦線文でモチーフを描く曾利系の土器や、内彎する無文の口縁部が開き、頸部を蛇行隆帯で区画する梨久保B類系の土器が出土しており、概ね加曾利EⅠ式後半段階に位置付けられる。

その他、第4次調査の集石土壇は出土遺物がなく、時期不詳であるが、加曾利E式期所産と考えられる。また、第4次調査の第25号土壇からは、称名寺式古段階のI b式段階と考えられる土器が出土しており、後期初頭段階の貴重な資料が得られている。

第8次調査となる今回の調査は、第3次調査区のほぼ北側に当たる部分で、南北方向と東西方向に走る町道に挟まれた1600㎡が対象となった。

調査区は標高43m前後のほぼ平坦面であるが、調査区東側がやや高く、西側に向かって若干傾斜しており、遺構確認面のローム面で約50cm程の比高差がある。調査区の西側は、葛川低地へ向かって緩く傾斜しており、調査区全体も概ねこの方向へ傾斜している。

調査は10m四方のグリッドを基本にして、南北方向にA～Fまで、東西方向に1～10までのグリッドを設定して行った。

検出された遺構は縄文時代中期の住居跡5軒、中世の竪穴状遺構1軒、中・近世の掘立柱建物跡8棟、縄文時代中期の集石土壇11基、埋甕1基、土壇104基、堀・溝7条、小ピット多数であった。

縄文時代の遺構は6グリッドより西側の、ほぼ中央部より西側に分布しており、その他遺物の薄い散布は認められるものの、D-7～8区にかけて土器の集中する部分が一ヶ所ある程度であった。

住居跡は4グリッドから西側に第1号住から第4号住の4軒、C-6グリッドに第5号住の1軒が分かれて存在し、そのほぼ中央部分に集石土壇が住居跡と重複しながら存在している。第1号住と第3号住が勝坂式段階で、第2号住が勝坂式終末から加曾利EⅠ式初頭にかけての段階、第5号住が勝坂式終末から加曾利

第4図 遺跡周辺の地形図(1)



6. 仏坂 8. 川角古墳群 48. 西ヶ谷北 50. 苗木原 51. 西ノ久保 52. 立堀 53. 前原 54. 西ヶ谷
 56. まま上 57. 築地 58. 前通 59. 大利原 61. 船原前 63. 八坂神社前 64. 上 65. 大林坊 70. 満
 願寺南 83. 愛宕塚 91. 北原 92. 愛宕台 93. 西原 106. 鎌倉街道

第5図 遺跡周辺の地形図(2)



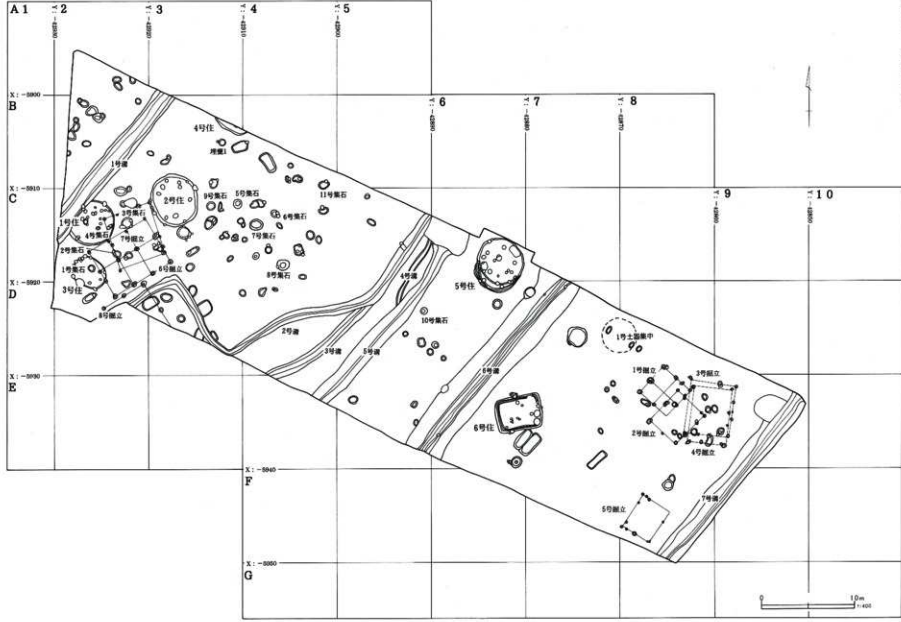
E I式初頭にかけての3軒の重複住居であり、第4号住が加曾利E II式新段階と判断される。勝坂式でも第1号住は井戸尻II式段階に、第3号住は藤内II式・阿玉台III式段階に比定されるものと思われることから、住居跡はそれぞれが微妙な時間差が看守される。従って、今回の調査範囲から住居跡群が環状を構成していたかは不明であるが、時期が異なるにしても結果的に中央部に集土・土壇を配し、住居跡の構築されない空間が意識されていたことが想定されるのである。

掘立柱建物跡は調査区の間端に分かれて分布し、第1号掘立～第5号掘立が東端に、第6号掘立～第8号掘立が西端に存在する。第2号掘立のピットからは平安時代の土師器製の破片が出土しており、第3号掘立の

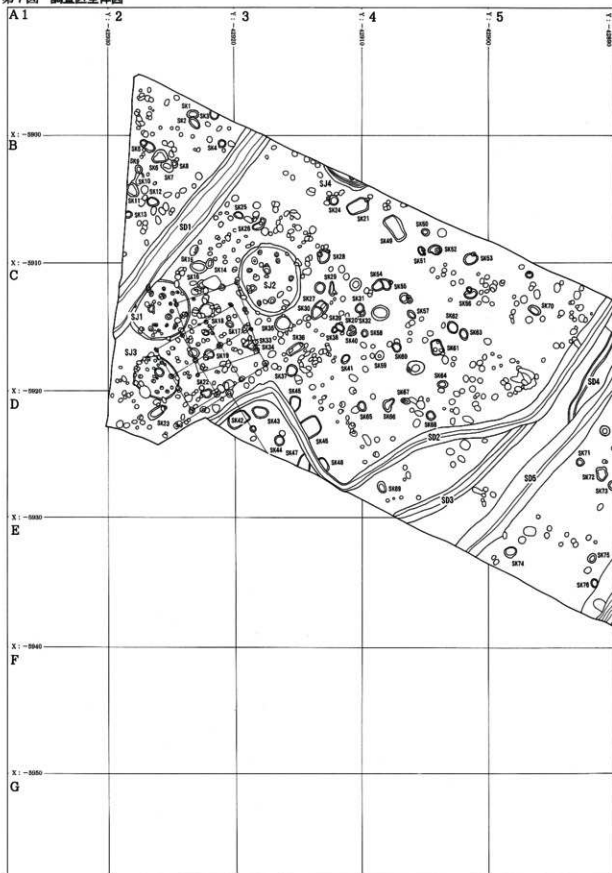
掘立柱建物跡は中・近世の所産と思われるが、重複して、軸方向にずれが生じているなど、何時期かが想定され、古代に遡るものが存在する可能性も高い。他に、第6号住とした堅穴状遺構も、中世段階の所産と考えられる。

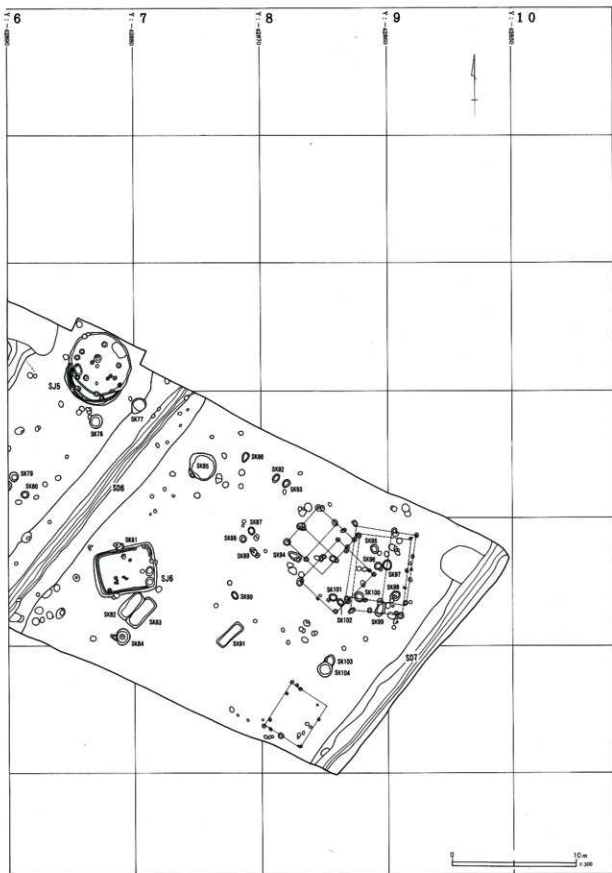
溝は第1号溝、第3号溝、第5号溝～第7号溝が北東方向に平行して走り、第2号溝がクランク状に蛇行している。時期は、第1号溝、第6号溝が中世で、他は近世の所産と判断される。

ピットは多数検出されたが、その層属等が不明なためグリッド内において通し番号を付けた。縄文時代から古代、中・近世のものまで存在し、調査区の西半分にも多く分布している。



第7图 調査区全体图





IV 遺構と出土遺物

1 住居跡

第1号住居跡(第8図～第12図)

C-2区に位置する。住居跡北西部が第1号溝と重複し、東側で第7号掘立柱建物跡と、中央部付近で第4号集石土壇と重複する。いずれの遺構よりも、本住居跡の方が古い。

住居跡のプランはほぼ円形で、長径5.00m×短径4.70m×深さ0.25mを測る。床面はほぼ平坦で、壁溝はなく、壁はやや緩く立ち上がる。中・近世のピットが多数重複するため、住居跡に伴う柱穴は不明瞭であるが、19本を認識した。主柱穴は5本と思われるが、柱穴が多数検出され、重複するものもあるため、建て替えられている可能性が高い。ピットの深さはP1=51cm、P2=49cm、P3=20cm、P4=71cm、P5=8cm、P6=61cm、P7=38cm、P8=27cm、P9=72cm、P10=32cm、P11=17cm、P12=46cm、P13=24cm、P14=48cm、P15=22cm、P16=41cm、P17=56cm、P18=22cm、P19=24cmである。

炉は埋堯炉で、胴部下半を欠損する深鉢を使用しており、中央部のやや西寄りに存在する。

住居跡の所属時期は、炉体土器から勝坂式の終末に位置付けられる。

出土土器(第9図1～第12図57)は殆どが覆土中の出土で、勝坂系の土器群が主体を占め、加曾利E系の土器群は殆ど含まれていなかった。

1は炉体土器である。胴下半と口縁部の一部を欠損するが、キャリバー形の深鉢形土器で全体の文様構成が把握される。口縁部は4単位の突起が付き、突起を中心に文様帯を4単位の区画し、変形した三角区画文を上下に組み合わせる構成を採る。口縁部の区画隆帯上には刻みを施し、隆帯脇には沈線に沿わせる。区画内には縦位の集合沈線を充填施工する。頸部から胴部にかけては刻みのない低平な隆帯で横位多段の文様帯を区画し、楕円区画文を配している。この楕円区画文は上下でずれる様に配置しており、4単位の構成

されるが、頸部ではその大きさを変えており、胴部では楕円区画文を3単位の配置し、足りない1単位分を楕円区画文間の隙間に集合沈線を充填施工することによって充当している。口径28.8cm、現存高22.4cmを測る。

4、5は炉体土器として1の外側に埋められていた土器である。胴部の大形破片で、1と同様に楕円区画文を多段に配し、区画隆帯上に刻みを施す。

2は円筒形の深鉢形土器で、口縁部と胴部の約半分が現存する。口縁部無文帯を隆帯で区画し、2本対の隆帯を垂下して胴部文様帯を縦位区画する。胴部モチーフは隆帯の渦巻文や斜位に交差させるモチーフを主幹モチーフとし、余白に集合沈線文や爪形文を充填施工する構成を採る。隆帯上には刻みを施さず、隆帯脇に沈線と爪形文に沿わせる。推定口径20cm、現存高21.2cmを測る。3は口縁部の無文帯下に隆帯の楕円区画文を配する構成の深鉢で、楕円区画文間には横位の沈線文を充填施工する。隆帯上には刻みを施し、隆帯脇に沈線と爪形文に沿わせ、区画に沿って沈線の小波状文を施工する。最大径19.2cm、現存高8.4cmを測る。

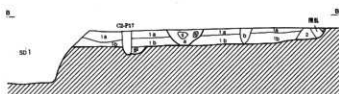
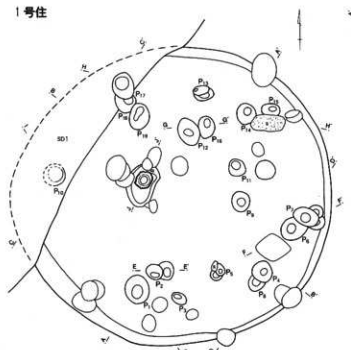
6は円筒形の深鉢で、胴下半が縄文帯となるものである。胴上半は刻みを施す隆帯で縦位区画を行い、区画内に縦位構成のパネル状沈線区画文を施す。区画内には集合沈線文を施工する。

7～13は各部位で楕円区画文を施工するものである。7～11は胴部に、12は底部付近に、13は口縁部に施工する。区画は隆帯で行うが、隆帯上に刻みを施すものが多く、隆帯脇には沈線に沿う構成が多い。14～23は隆帯区画と各種の充填文を組み合わせるもので、充填文は沈線描出のものが多いが、16の様に爪形文に小波状沈線に沿わせるものや、17の様に爪形文を挟む沈線文でモチーフを描くものなどがある。

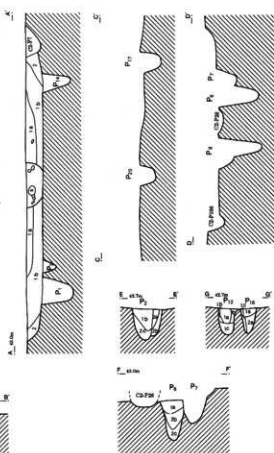
24、25は同一個体であるが、刻みを施さない隆帯で渦巻文を中心としたモチーフを連結する土器で、口縁

第8図 第1号住居跡

1号住

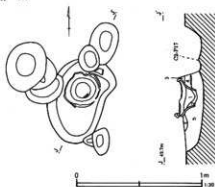


- 1 黒褐色土 黒色土を主体にし、ロームを混入する。
 - a. ローム粒子を少量。
 - b. ロームブロックを少量に混入する。遺物は少ない。
- 2 明褐色土 均一な黒褐色土で構成される。
 - a. 炭や土器を多量に混入する。
 - b. ロームブロックを混入し、しまりは弱い。



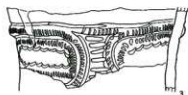
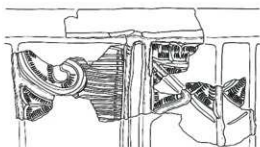
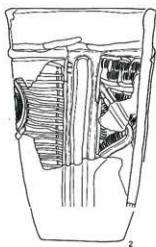
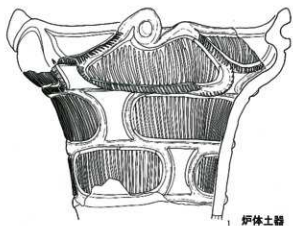
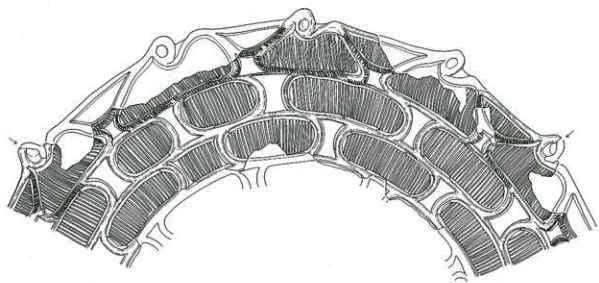
- 1 黒褐色土 黒色土を主体にし、ローム粒子を混入する。しまりは弱い。
 - aはローム粒子を殆ど含まない。b、cに向ってローム粒子の量は増加する。
- 2 暗黄褐色土 黒色土を主体に、ロームブロックを混入する。aはその量が少ないがb、cに向ってロームブロックの量は増加する。

炉跡



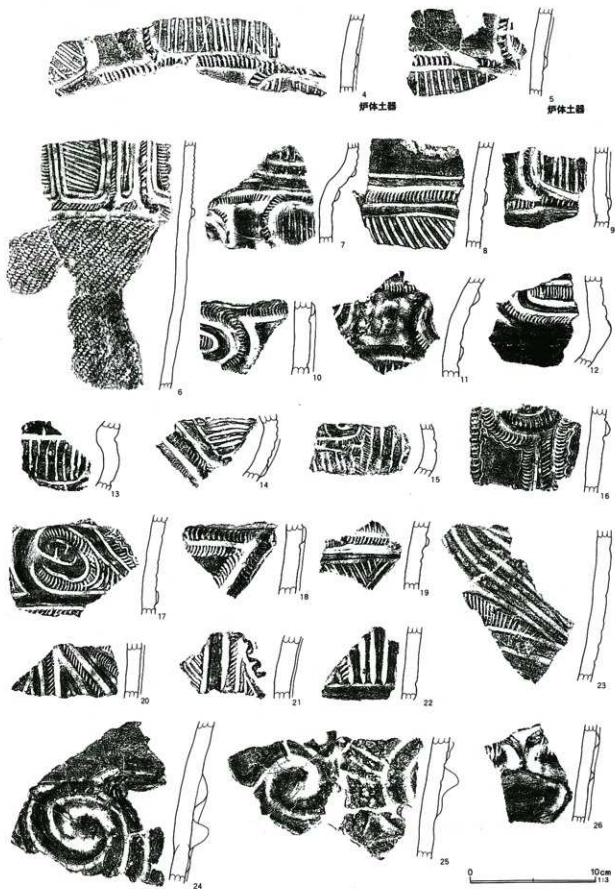
- 1 黒色土 僅かにローム粒子を混入する。しまりは弱い。
- 2 暗茶褐色土 焼土ブロックを少量混入する。しまりはやや強い。
- 3 茶褐色土 焼土粒子を多量に混入する。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを多量に混入する。
- 5 暗黄褐色土 炉跡り方

第9图 第1号住居跡出土遺物 (1)

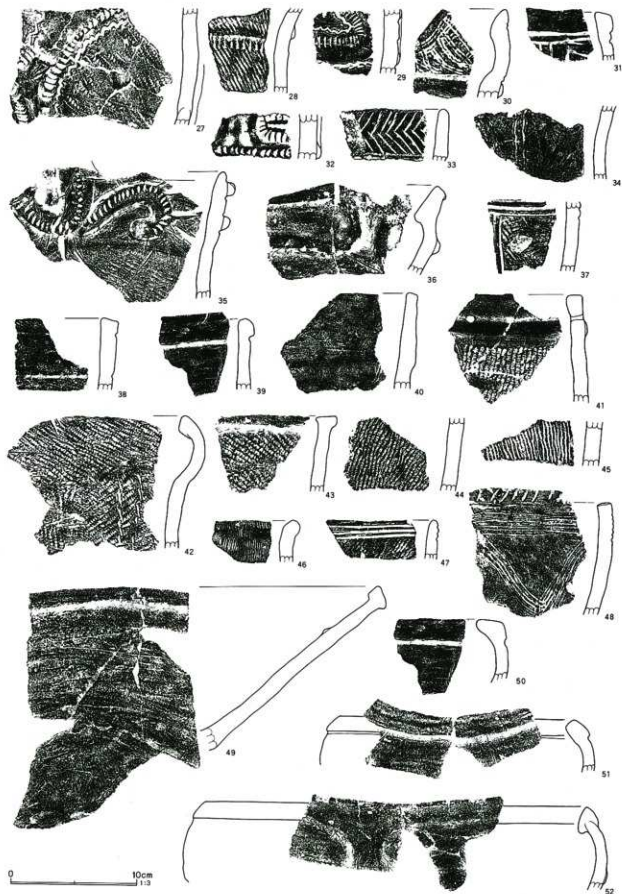


0 10cm
1/4

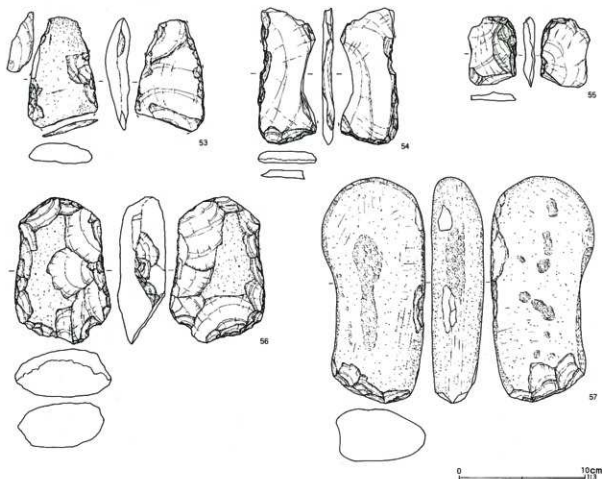
第10图 第1号住居跡出土遺物 (2)



第11图 第1号住居跡出土遺物(3)



第12図 第1号住居跡出土遺物(4)



部を無文帯とする大形の円筒形深鉢である。

26～30、48は阿玉台系の要素が見られる土器群である。26は断面三角形の蛇行隆帯で区画を施し、縦位の切り込む様な爪形文を施す。27、28は地文縄文上に隆帯で区画を施し、爪形文と小波状沈線を沿わせるものである。28は幅広の角押状の爪形文を施文する。29、32は隆帯脇に爪形文と小波状沈線を沿わせ、30は半載竹管内面の平行刺突文でモチーフを描く口縁部破片である。48はやや内彎して開く口縁部に歯状条線で三角モチーフを描き、角頭状口唇部に刻みを施す。

31は口縁部がやや内彎して立つ深鉢で、沈線のみでモチーフを描くものである。33は円筒形深鉢の口縁部で、口縁部に沈線の矢羽根状モチーフを描く。34はやや小蛇行する平行沈線を垂下するもので、阿玉台系の要素が強い。34は半載竹管内面を使用した平行沈線を区画文に使用するもので、地文に縄文を施文する。

35は円筒形深鉢の口縁部が段状を呈し、刻みのある隆帯で蕨手状の渦巻文を施す。胴部には単節LR縄文を施す。38～40も円筒形深鉢で、39、40は口縁部が無文であるが、38は口唇部外端と胴区画線部に単節縄文RLを施文する。

41は樽形の有孔鐏付土器である。口縁部に低い鐏が巡り、鐏の上に孔を穿っている。胴部は0段多条RLを斜位施文し、条が縦走する。

42～46は縄文のみを施文する土器で、42は丸く内彎する口縁部が開く深鉢で、単節RLを口縁部で横位に、胴部で縦位に施文し、その上から結節部の回転である縦縄文を縦位施文する。43は口唇部上端が平坦面を形成し、胴部に横位の単節RLを施文する。44は0段多条縄文、45、46は撚糸文を施文する。47は口縁部に重複施文の平行沈線文を施文する。

36、49～52は浅鉢である。36は口縁部がやや内彎

して立つ器形で、低隆帯の楕円区画を施す。49は底部から直線的に開く浅鉢で、内面に一段縁を持つ。50～52は口縁部の内彎する浅鉢で、50、51は無文、52は半肉彫状の楕円区画を施している。

53～57は石器である。55は頁岩製の剥片で、長さ5.5cm、幅3.9cm、厚さ0.9cm、重さ19.5gを測る。

53、54は石斧である。53は刃部を欠損しているが、頁岩製で、長さ8.8cm、幅5.5cm、厚さ1.9cm、重さ93.2gである。54は結晶片岩製で、長さ10.8cm、幅4.5cm、厚さ0.9cm、重さ58.1gを測る。

56は流紋岩製の鏃器で、刃部を再生している。長さ11.4cm、幅7.6cm、厚さ3.8cm、重さ474.6gを測る。

57は結晶片岩製の敲石で、長さ17.8cm、幅8.1cm、厚さ4.1cm、重さ1029.9gを測る。

第2号住居跡 (第13図～第20図)

B～C-3区にかけて位置する。多数の中・近世ピットと重複するが、住居跡の床面までに達するものは比較的少ない。

住居跡のプランは南北方向にやや細長い楕円形を呈し、長径5.47m×短径4.94m×深さ0.47mを測る。床面はほぼ平坦で、壁近くでやや高くなり、そのまま緩く壁として立ち上がる。柱穴は9本を認識したが、主柱が4～5本と推定されるので、建て替えの可能性が高い。ピットの深さはP1=74cm、P2=66cm、P3=50cm、P4=86cm、P5=82cm、P6=64cm、P7=69cm、P8=60cm、P9=44cmである。

炉は地床炉で、中央部に細長い腰が横たえてあるため添石炉に分類されよう。炉南半分に焼土を含む土塊状のピットが検出されたことから、古い炉を壊しその上に新しい地床炉を構築したのと思われる。

住居跡の所属時期は、炉体土器、埋壺がないため判然としないが、覆土出土土器からおよそ勝坂系終末から加曾利EⅠ式初頭にかけての所産と推定される。

出土遺物 (第14図1～第20図143) は覆土中より多量に検出されており、大半が勝坂系土器で、少量の加曾利E系土器が含まれている。

9個体が器形復元された。1は口縁部に無文帯をもち、胴下半に燃糸文を施する円筒形深鉢である。文様帯のモチーフは縦のS字状に捻れた懸垂隆帯と、逆R字状隆帯モチーフが交互に配されて、器面を縦位に4分割する。隆帯モチーフ間は三又沈線文や、交互刺突文を挟み平行沈線で隙間を埋めるモチーフを描く。隆帯上には矢羽根状の刻みが、胴部の分帯隆帯には交互刻みを施す。地文には細密な燃糸文を施す。底径8cm、最大径15.2cm、現存高22.8cmを測る。

2は胴部が強く括れるキャリバー形の深鉢で、口縁部の4分の1程が現存する。4単位の把手を持ち、口縁部に幅広い無文帯を持ち、把手から伸びる隆帯で口縁部を4単位の分割する。把手には矢羽根状刻みと、交互刻みを施す。把手間には矢羽根状刻みを施す隆帯が垂下して、さらに2分割している様である。把手の裾部分には縦位のS字状隆帯が垂下し、押捺状の交互刺突が施される。余白には沈線によるフォーク状の三又文を配している。推定口径28cm、最大径36cm、現存高14.5cmを測る。

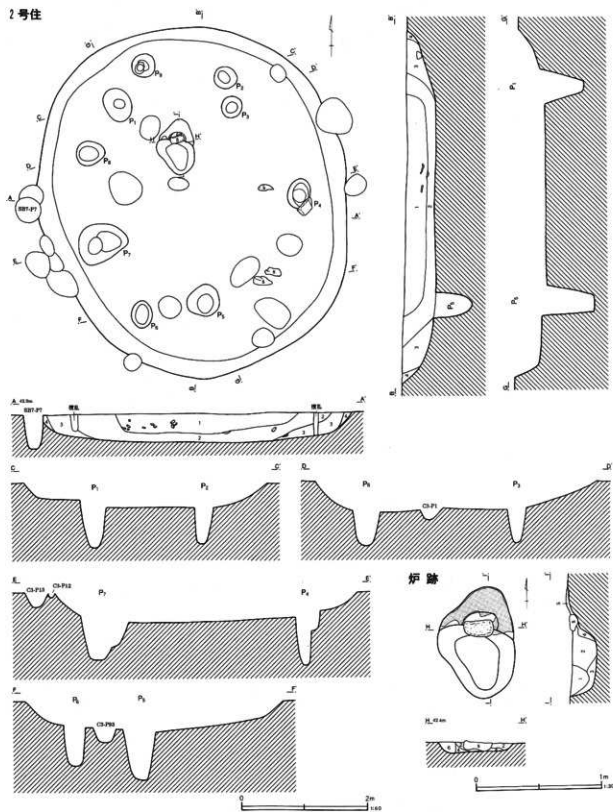
3はキャリバー形深鉢の口縁部破片で、口縁部の突起から垂下する隆帯が、渦巻文を構成するものと思われる。渦巻文内には、斜位の集合沈線文を充填施す。推定口径28cm、現存高9.2cmを測る。

4は頸部で括れ、無文の口縁部が開く器形の小型の深鉢である。口縁部は内端が突出し、上端がやや幅広いの平坦面となる。頸部区画隆帯は、矢羽根状刻みと交互刺突を繰り返して施すもので、胴部には0段多条縄文RLの斜位施文による縦走縄文を施す。口径11.4cm、現存高14cmを測る。

5は胴部が強く括れるキャリバー形の深鉢で、無文の口縁部が「く」状に強く屈曲する。この屈曲部分で口縁部が上下に区画され、上段が口縁部に、下段が頸部に相当する。口縁部の盛り上がりか隆帯となって頸部から胴部へと垂下し、胴部を縦位分割する。胴部には0段多条縄文の斜位施文による縦走縄文を施す。口縁部が半分ほど現存し、推定口径27.2cm、最大径34cm、現存高19.6cmを測る。

第13図 第2号住居跡

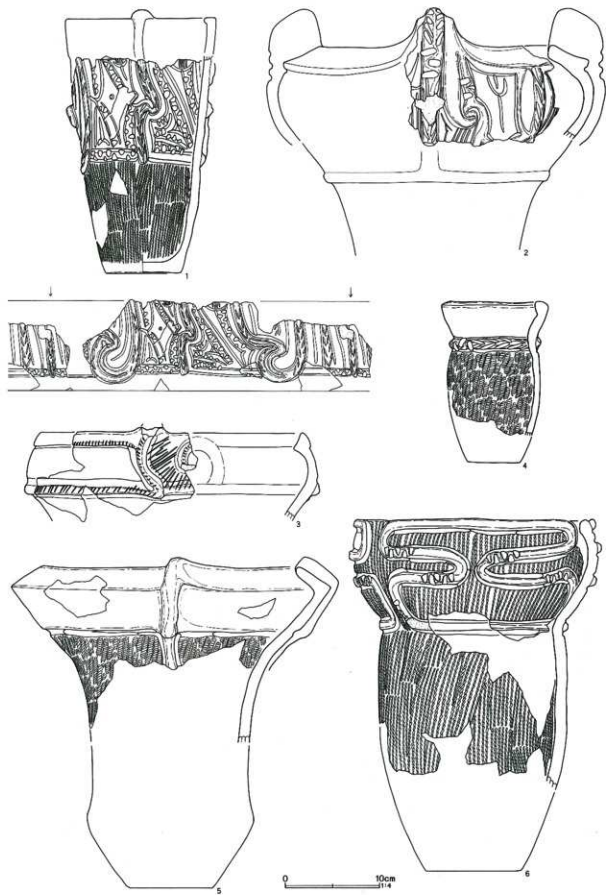
2号住



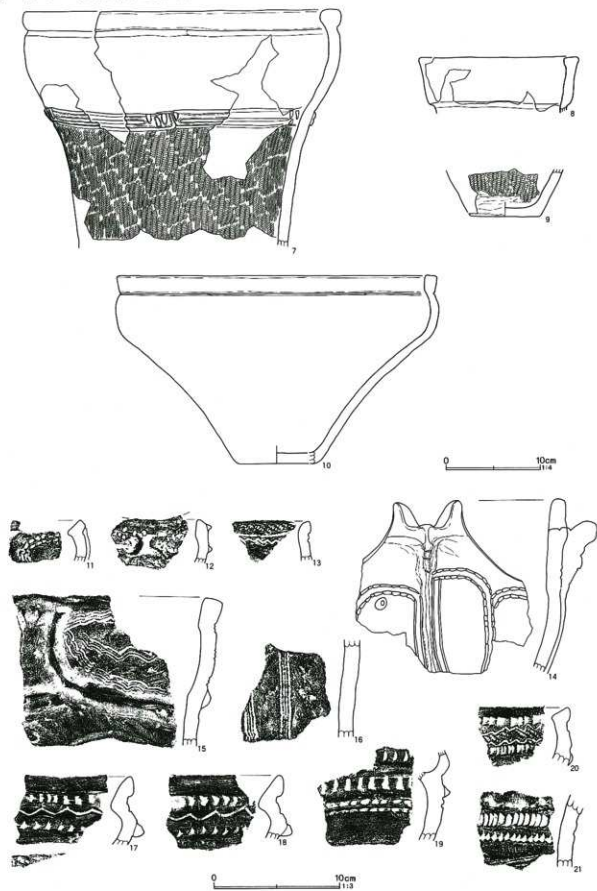
- 1 黒褐色土 土器片、礎を多く含む。ローム粒子、炭化物粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。
- 3 暗褐色土 2層より色調はやや明るく、ローム粒子は2層を含む。
- 4 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。

- 炉跡
- 1 黒褐色土 ローム粒子を含む。
 - 2 黒褐色土 ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を含む。
 - 3 暗褐色土 大形のロームブロックを多く含む。
 - 4 黄褐色土 ロームブロックと焼土ブロックから成る。
 - 5 暗褐色土 焼土粒子を含む。
 - 6 暗褐色土 しまり強い。

第14图 第2号住居跡出土遺物 (1)



第15图 第2号住居跡出土遺物 (2)



6は頸部で括れるキャリバー形の深鉢で、胴下半部がやや太い器形である。口縁部は球形に開き、口縁部区画隆帯と頸部区画隆帯が連結して完結する「工」字状モチーフを、3単位に施文する。結果的には、口縁部と頸部の区画線は存在せず、「工」字状モチーフ間を中心に見れば、「十」字状のモチーフ構成となる。描出隆帯上には、押捺状の交互刺突文を部分的に施文し、地文には太い燃糸文Lを施す。口縁部における隆帯の使い方は、加曾利E式のそれと共通する。底部を欠損し、口縁と胴部の約半分程が現存する。推定口径26cm、現存高26.8cmを測る。

7は無文の口縁部が開くキャリバー形深鉢で、口唇部が肥厚し、上端が平坦面を形成する。胴部は2本隆帯で区画し、押捺状交互刺突文を単位文的に施文する。口縁部に把手が付くかは不明であるが、胴部は0段多条縄文RLの縦走縄文のみ施文する。約半分程を現存し、推定口径34.2cm、現存高24.5cmを測る。

8は円筒形深鉢の口縁部で、やや幅広い無文帯を形成する。推定口径17cm、現存高5.8cmを測る。9は底部破片で、単節RLの縦走縄文を施文する。推定底径7.4cm、現存高5.2cmを測る。

10は口縁部が「コ」字状に屈曲して開く、やや腰高な浅鉢で、約3分の2程が現存する。推定口径34.5cm、推定底径8.5cm、器高20cmを測る。

11～21は阿玉台系、もしくはその影響を強く受けているものである。11～14は口縁部破片で、13以外は雲母を多く含む。11は楕円区画に沿って2列の結節沈線を、12は楕円区画隆帯上に細かな刻みと、区画内に結節沈線を巡らす。13は口唇部外端に縄文を施文、口縁部をベン先状結節沈線で区画して鋸歯状沈線を施す。破片下部部に、焼成前の穿孔が見られる。14は双頭の獣面状把手を持つ波状口縁の深鉢で、把手から垂下する隆帯で口縁部を区画し、半載竹管による2列の結節沈線と平行沈線でモチーフを描く。獣面は具象的ではないが、木兔の様にも見える。以上、施文の特徴から阿玉台Ⅱ式に比定されよう。

15～21は幅広い爪形文や連続刺突文、鋸歯状沈線文

を施文するものである。15、16は鋸歯状工具による小波状文や結節条線文を施文する。17～20は内彎して開く口縁部破片で、17、18は同一個体である。20は地文に縄文を施文し、19は把手が付く。21は幅広い爪形文と、細かな連続刺突文が組み合わせられる。以上勝坂式との折衷が進んだ土器群で、およそ阿玉台Ⅲ式段階に比定されよう。

22～92は勝坂系の土器群である。22～25は幅広いキャタピラ文とベン先状三角押文を組み合わせる施文するものである。22、23は口縁部破片で、幅広い内削状を呈する。24は隆帯脇にキャタピラ文を沿わせ、充填文として集合三角押文を施文する。25は三叉状印刻文に鋸歯状三角押文を連結するモチーフを構成する。以上、施文の特徴や精緻な作りから新道式に比定されよう。

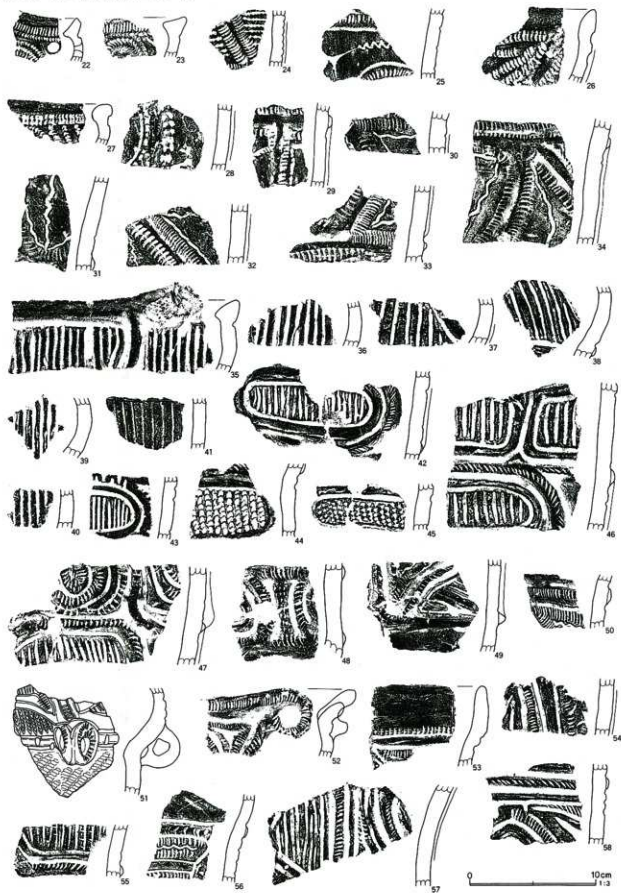
26～34は隆帯脇に連続爪形文と小波状沈線文を沿わせるものである。キャタピラ文はやや粗い連続爪形文へ、三角押文は沈線文へと変化している。26、27は口縁部破片で、口縁端部の稜が丸みを帯びてくる。また、モチーフを描出する隆帯も丸みを帯びてくる等動案すると、以上は藤内式段階に比定されよう。

35～92は隆帯脇に沈線を沿わせるのを特徴とする土器群と、それに組成する土器群である。35～48は楕円区画文を主たるモチーフにするもので、区画内には集合沈線を充填施文するものである。44、45は集合沈線の代わりに、ベン先状結節沈線を使用する。35～40は同一個体で、キャリバー形深鉢の口縁部破片である。42、46は楕円区画隆帯上に細かな刻みを施す。47は楕円区画文と渦巻文が組み合うモチーフ展開であり、48は楕円区画文の間に連続刺突文を充填施文する。

49、50は隆帯区画に沈線を沿わせ、その外側に爪形文を施文するものである。爪形文は三叉状沈線文の縁取りとして施文される場合が多い。

51～53は口縁部破片で、51は文様帯下端に眼鏡上の把手を付ける。口縁部の余白には爪形文で縁取られた三叉文と、充填文要素としてベン先状結節沈線文を施文する。52は口縁部文様帯の主文様を隆帯と凹線状の

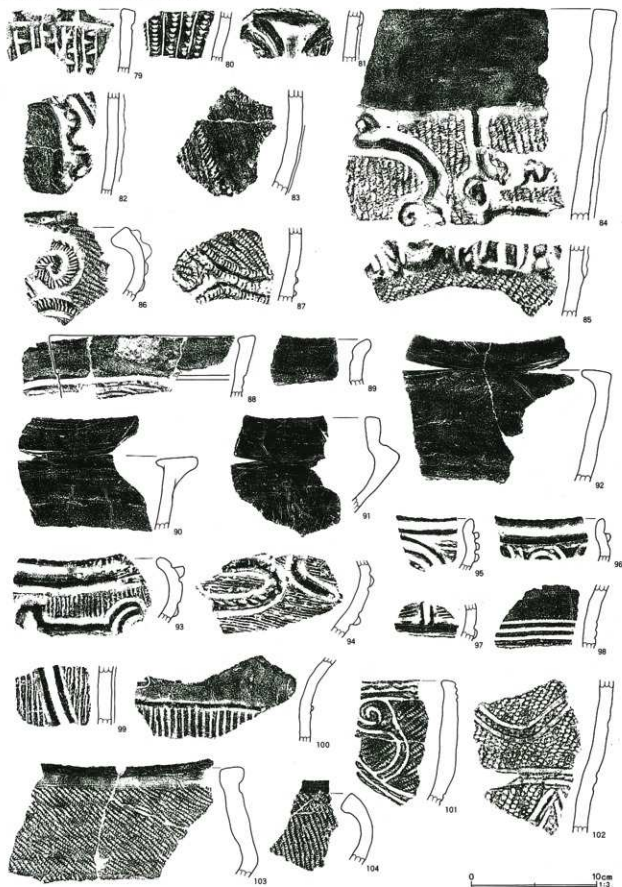
第16图 第2号住居跡出土遺物 (3)



第17图 第2号住居跡出土物(4)



第18图 第2号住居跡出土遺物 (5)



沈線文で描き、余白に爪形文で縁取られた三叉文を配する構成を採る。53は円筒形深鉢の口縁部で、口縁の区画沈線に沿って、爪形文を施す。

54～63は隆帯の区画文と、その間隔を埋める充填文が様々なモチーフ構成を採るものである。55、56は楕円区画文、54、57、59、61～63は渦巻文や三角状区画文の間に、爪形文で縁取られた三叉文を組み合わせる構成となる。60は交互刺突文を挟む平行沈線で、上下に対弧状モチーフを描き、縦位分割線と融合した三叉文の間に充填する構成を採る。対弧状文内には、2分割する3本沈線を垂下する。61、64は胴部が縄文帯となるもので、それぞれ単筋R Lを縦位施文する。65は60と同様な表現で、円形モチーフを描く。

66～80は沈線主導で、モチーフを描く土器群である。66は隆帯による蜂状の楕円区画内に、太沈線の渦巻文と三叉文を施文する。67は交互刺突文を施す隆帯で文様帯を縦横に区画し、太沈線で円形文や三叉文を施文する。68～70は区画内を埋める集合沈線や、三叉文であるが、縁取る爪形文を施さないものである。

71は爪形文を挟む平行沈線文で渦巻文を施文する。73、74は同一個体である。胴部に燃糸Lを施文し、爪形文や交互刺突文を挟む沈線文で、円形モチーフを横連結するモチーフ構成を採る。

75、76は円筒形深鉢の同一個体で、隆帯区画内に太沈線で渦巻文や三叉文を施文するものである。胴部は条線文を地文とし、隆帯上や沈線脇に刻みや爪形文を施文しない。

77、78は円筒形深鉢の同一個体である。隆帯と沈線の縦位構成のモチーフを施文し、隆帯上には刻みを、沈線間には交互刺突文を施文する。胴部は明瞭に区画されないが、文様の収束する部分から、地文に燃糸Lを施文する。79、80も円筒形深鉢で、79は交互刺突文を挟む平行沈線を垂下させ、80は連続刺突文を挟む平行沈線文を垂下する。

81～85は隆帯文が主導的にモチーフを描くものである。81は隆帯区画内に沈線文を施文し、82は交互刺突を施した蛇形隆帯でモチーフを描く。83は全体構成

は不明であるが、刻みを施す低隆帯と、磨消縄文、地文縄文が組み合せてモチーフを構成するものと思われる。

84は円筒形深鉢で、口縁部に無文帯を構成し、胴部の0段多条縄文R L地文上に、カマボコ状隆帯で小渦巻文を連結するモチーフを描く。85も胴部に縄文を持つ円筒形深鉢であるが、文様帯は隆帯で区画し、モチーフを太沈線で描いている。

86はキャリバー形深鉢の口縁部破片で、地文に0段多条縄文R Lを施文し、刻みを施す隆帯で渦巻文を描いている。

87は単筋縄文L R地文上に、2本対の隆帯でモチーフを描き、隆帯脇に結節沈線に沿わせており、大木系の要素を強く持つ。

88～91は口縁部の無文帯部分である。88、90、92は円筒形深鉢と思われる。89、91は口縁部が彫らむ器形のものと思われる。

93～102は加曾利E系の土器群である。93～100は口縁部文様帯を持つキャリバー形深鉢で、93は燃糸地文上に1本隆帯で横S字状文や、連結文を施文する。93は燃糸Lを縦位施文し、94は燃糸Rを横位施文する。94の隆帯上には刻みを施している。

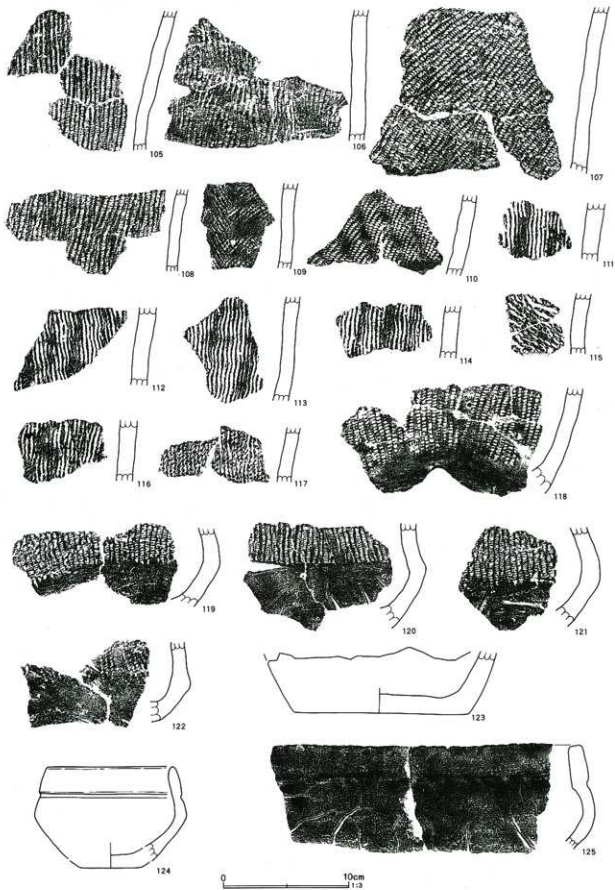
95、97、99は2本隆帯でモチーフを描き、96は沈線の渦巻文を施文する。98は頸部無文帯を3本沈線で区画する。

100は頸部無文帯内に沈線の円形状文を施文し、隆帯で区画した胴部に集合沈線を地文として施文する。曾利系的な要素を持つ。以上、加曾利EⅠ式段階に比定され、94はその初頭段階に位置付けられる。

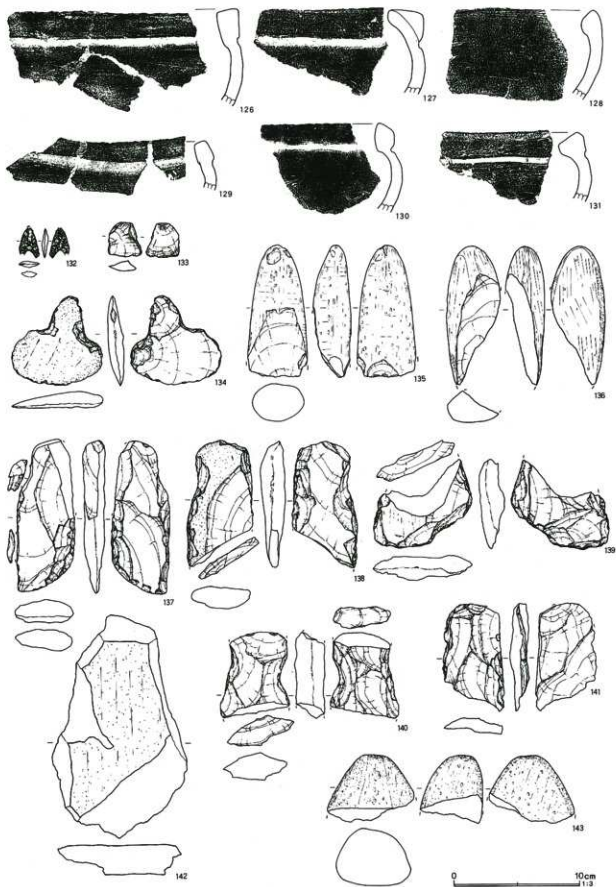
101、102は連弧文系土器で、101は唐草文的な構成を採る。102は胴部の上下に2本沈線の連弧文を施文する。両者とも、地文は単筋R Lの縦位施文である。加曾利EⅡ式の後半段階に位置付けられよう。

103～122は地文に縄文のみ施文される破片である。103は口縁部が屈曲、104は強く内彎する器形で、103は単筋R L、104は0段多条R Lを横位施文する。105～108は0段多条縄文R Lを施文する胴部破片で、107

第19图 第2号住居跡出土遺物(6)



第20图 第2号住居跡出土遺物 (7)



以外は条が縦走する。

109は単節LRを縦横施文して、羽根状縄文を構成する。110は単節RLを、間隔を開けながら縦位施文する。大木系的な要素として認識される。

111～117は捻糸文施文の胴部破片で、115のみやや条が横走する。

118～123は底部破片であり、119～122は算盤玉状を呈する。118は単節縄文RLの縦走縄文で、119～121は0段多条縄文RLの縦走縄文である。122は不鮮明であるが、捻糸Lを施文するものと思われる。123は無文である。

124～131は無文の浅鉢である。いずれも口縁部が内彎する器形である。124は算盤玉状を呈する小型の鉢形土器である。推定口径10.2cm、現存高7.5cmを測る。128は碗状を呈するものと思われ、他は口縁部が「コ」字状に屈曲する浅鉢である。

134～143は石器である。132は黒曜石製の石鏃で、先端部と脚部の一部が欠損する。長さ2.4cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重さ1.1gである。

133はチャート製の剥片で、長さ2.7cm、幅2.6cm、厚さ0.8cm、重さ4.7gである。

134は頁岩製の石匙である。握みの部分が大きく、長さ7cm、幅7.2cm、厚さ1.3cm、重さ47.2gである。

135、136は磨製石斧である。両者とも刃部を欠損し、135は砂岩製で、長さ10.5cm、幅4.7cm、厚さ3.5cm、重さ198.3gである。136は砂岩製で、長さ10.9cm、幅4.3cm、厚さ3.1cm、重さ126.5gである。

137～141は打製石斧である。137は砂岩製で、長さ12.1cm、幅4.1cm、厚さ1.8cm、重さ134.7gである。

138は刃部を欠損し、砂岩製で、長さ9.9cm、幅5.2cm、厚さ2.1cm、重さ109.4gである。139は刃部のみ現存し、頁岩製で、長さ6.8cm、幅7.7cm、厚さ2cm、重さ71.2gである。140は頭部と刃部を欠損し、頁岩製で、長さ6.8cm、幅5.5cm、厚さ2.4cm、重さ98.9gである。141は刃部を欠損し、頁岩製で、長さ8.5cm、幅4.9cm、厚さ1.6cm、重さ54.0gである。

142は緑泥片岩製の石皿の破片で、長さ17.6cm、幅

10.6cm、厚さ2.4cm、重さ531.8gである。

143は安山岩製の磨石で、大半が欠損するが、現存する頂部には敲打痕がある。長さ5.4cm、幅6.9cm、厚さ4.9cm、重さ179.9gである。

第3号住居跡 (第21図、第22図)

C-2区から、一部D-2区にかけて位置する。第1号集石、第6号掘立柱建物跡、多数の中・近世のピットと重複するが、本住居跡の方が古い。

住居跡のプランは北西方向に細長い楕円形を呈し、長径3.71m×短径2.94m×深さ0.09mを測る。床面はほぼ平坦で、壁溝はなく、壁は比較的緩く立ち上がる。中・近世のピットと重複するため、住居跡に伴う柱穴は不明瞭であるが、3本を認識した。ピットの深さはP1=36cm、P2=24cm、P3=42cmである。

炉は埋壺炉で、住居跡のほぼ中央部に位置する。埋壺土器は、胴下半部から底部にかけて現存する。炉穴の深さや土器の大きさを考慮すると、炉体土器としては口縁部を欠いた胴下半部のみを使用していた可能性が高い。

住居跡は出土遺物 (第33図1～10) が少なく、炉体土器も無文土器のため明確な時期を決定し得ないが、阿玉台Ⅱ式からⅢ式にかけての所産と推定される。

1は炉体土器である。胴下半部から底部にかけての無文部分のみ現存している。被熱による器面の荒れが著しいが、やや器壁が薄く、阿玉台系的な特徴を有する。底径12cm、現存高16.2cmを測る。

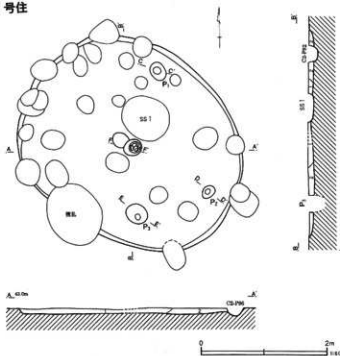
2は無文の口縁部破片で、角頭状口唇部が外反して開く緩いキャリバー形を呈するものと思われる。口縁部付近に指頭の整形痕が残る、阿玉台系的な要素を持つ。

3は断面三角形の隆帯を垂下してモチーフを描き、隆帯脇に並行沈線を施文するが、単沈線の2本施文である。部分的に結節状に施文するところがある。胎土に雲母を多く含む。阿玉台Ⅱ式に比定されよう。

4は無文の胴部破片で、粘土接合部分に装状の整形痕が残る。胎土がまだ柔らかいうちに器面整形が行わ

第21図 第3号・第4号住居跡

3号住

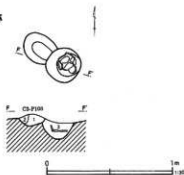


- 1 黒褐色土 炭化物粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。



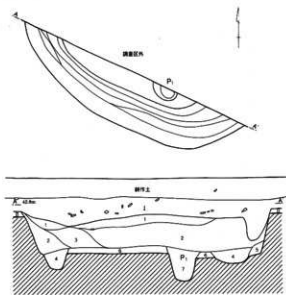
- 1 黒褐色土 黒色土を主体にし、混入物は殆ど含まない。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を混入する。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロックを主体にし、黒色土を混入する。

炉跡



- 1 黄褐色土 ロームブロックと粒子を多量に混入する。
- 2 赤褐色土 ローム粒子の量が少ない。ロームブロックは焼熟し、ポロポロしている。
- 3 黒褐色土 黒色土を主体にし、ローム粒子などの混入物は殆ど含まない。

4号住

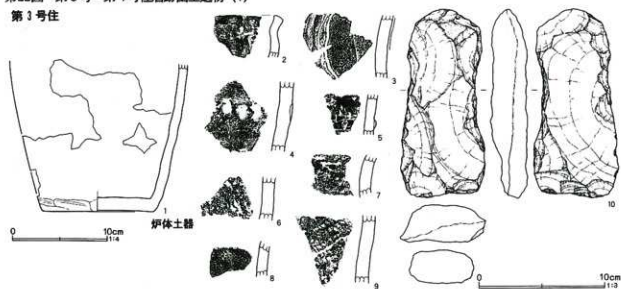


- I 黒色土 ローム粒子を少量含む。上層片を含む。
- II 褐色土 ローム粒子を多く含む。

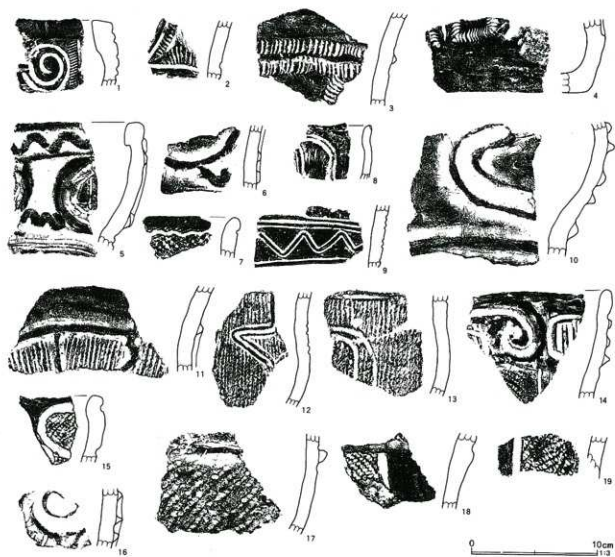
- 1 黒色土 ローム粒子を少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子を多く含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒子を多く含む。
- 4 褐色土 ローム粒子を多く含む周囲の覆土。
- 5 褐色土 コーナーの三角地帯、ローム粒子、ロームブロックを含む。
- 6 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロックを含む。

第22图 第3号・第4号住居跡出土遺物 (1)

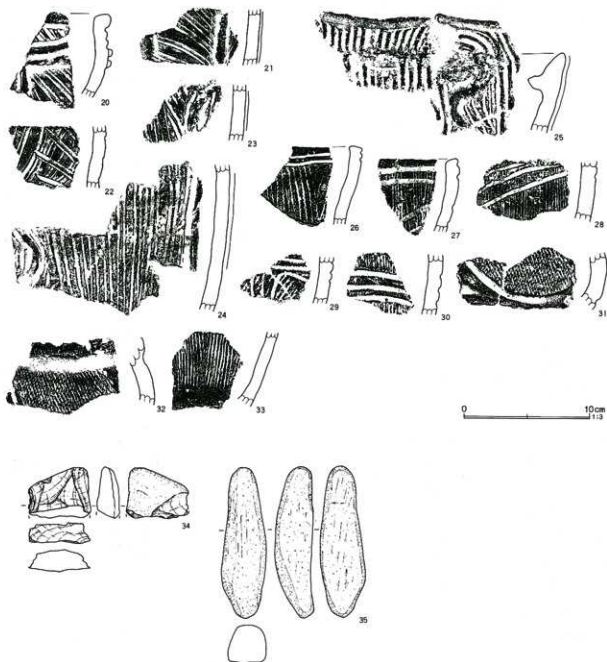
第3号住



第4号住



第23図 第4号住居跡出土遺物(2)



れており、柔らかい工具であることは確かであるが、鬘状の整形が指頭で行われたかは不明である。

5は低隆帯区画に沿って、角頭状の結節沈線を施文する。胎土に雲母は含まないが、単列の結節沈線文を施文するなど、やや古相を帯びている。

6～8は無文土器である。6、7は炉体土器と同一個体の可能性が高い。9は単節RLを縦位施文する。

10は唯一検出された石器で、頁岩製の打製石斧であ

る。長さ14.8cm、幅6.7cm、厚さ2.9cm、重さ344.8gである。

第4号住居跡(第21図～第23図)

B-3～4区にかけて位置する。住居跡の大半が調査区外にあり、住居跡の全貌を掴むことは難しい。しかし、調査区内にある住居跡の一辺から、およそ隅丸長方形のプランが想定される。床面はほぼ平坦で、壁

は急な角度で立ち上がる。壁溝が全周するものと思われるが、壁と壁溝の関係から、重複住居の可能性が高い。これは土層断面にも現れており、壁溝を持つ住居跡の方が新しいものと判断される。ピットは新しい住居跡に伴うものと思われ、深さはP1=44cmである。炉等其他の付属施設は、調査区内では未検出であった。

住居跡の時期は、出土土器（第22図1～第23図33）からおおよそ加曾利EⅢ式前半段階に位置付けられるものと思われる。

1～8は勝坂系土器群である。1は口縁が内彎して開くキャリバー形深鉢で、角頸状口唇部が肥厚して上端に平坦面を形成する。口縁部文様帯には沈線の渦巻文を施文する。2は隆帯脇に沈線が沿い、爪形文で縁取られた三叉文を施文する。3、4は爪形文を沿わせるだけの隆帯文モチーフを描くものである。3はキャリバー形深鉢の頸部破片で、4は底部破片である。5、6は隆帯のみでモチーフを描くもので、5はキャリバー形深鉢の口縁部破片である。口縁部上端を小波状隆帯で区画し、文様帯内に楕円区画文を配する構成である。楕円区画文内には沈線を充填施文し、小波状隆帯で区画が連結される。6は同種の頸部か胴部破片である。7は口縁部破片であるが、地文縄文単節RLを施文し、上端部を小波状沈線で区画する。8は口縁部がやや外反する小形の深鉢で、口唇部に刻みを持ち、半截竹管の平行沈線で曲線的なモチーフを描く。勝坂式段階でも3、4が籜内式段階、他は井戸尻式段階に比定されよう。

9～19は加曾利E系土器群である。いずれもキャリバー形深鉢で、9は頸部文様帯内に半截竹管の鋸歯状平行沈線を施文する。10は口縁部文様帯に2本隆帯の横S字状モチーフを描くものと思われ、地文が無文となる。11は頸部無文帯から胴部文様帯にかけての破片で、隆帯懸垂文が燃糸し地文上に垂下する。12、13は胴部がやや張る器形の破片で、燃糸し地文上に平行沈線の曲線文を施文する。以上、加曾利EⅠ式に比定され、9、10は初頭段階に位置付けられよう。

14～16は隆帯の渦巻文と楕円区画文からなる口縁

部文様帯の破片で、モチーフはかなり崩れている。14は楕円区画内に沈線文を施文することから、曾利系の要素を強く持つと言える。18、19は磨消懸垂文を持つ胴部破片である。17、19は単節RL、18は単節LR縄文である。加曾利EⅢ式に比定される。

20～25は曾利系の土器群である。20～23は同一個体で、口縁部文様帯を持つ曾利系の深鉢である。口縁部の区画隆帯内に沈線を充填し、胴部に隆帯懸垂文を垂下させ、大きな綾杉状沈線文を地文とする。24は胴部破片で、隆帯懸垂文と地文に縦位沈線を施文する。25は頸部の括れる深鉢で、口縁部と口縁部裏面に半肉状の沈線を施文する重弧文系の土器である。口唇裏に凸帯を持ち、凸帯部分までを施文域とする。口縁部には大きくうねる蛇行隆帯を垂下する。以上、曾利Ⅲ式段階に比定されよう。

26～32は連弧文系土器群である。26～30は3本沈線で連弧文を描くが、31、32は磨消縄文で連弧文を描出する。加曾利E式後半からⅢ式段階にかけての土器群である。

34は結晶片岩製の剥片で、打製石斧の一部の可能性もある。長さ4cm、幅5.1cm、厚さ1.8cm、重さ39.8gである。

35は砂岩製の敲石で、長さ12.1cm、幅3.6cm、厚さ3.3cm、重さ152.6gである。

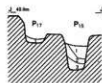
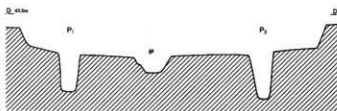
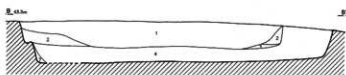
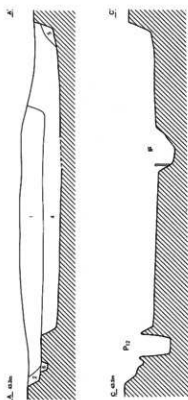
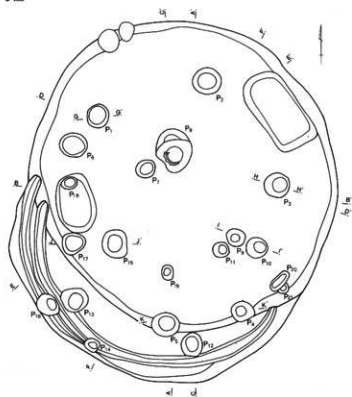
第5号住居跡（第24図～第46図）

C～D～6区に位置する。中・近世のピットと重複するが、他の遺構との重複はない。しかし、第5号住居跡は、円形もしくは隅丸方形に近い楕円形のプランを持つ、3軒の住居跡の重複住居跡である。その3軒の重複順序や支柱穴が、ある程度把握されたため、それぞれを独立して古い順に第5a号住、第5b号住、第5c号住として番号を付けた。

中・近世のピットとの重複が少ない上、住居跡の床面にまでとどかないピットが殆どで、住居跡の柱穴は全体で21本を認識し得た。ピットの深さはP1=60cm、P2=55cm、P3=74cm、P4=52cm、P5

第24図 第5号住居跡

5号住



第25図 第5号住居跡遺物出土状況



SJ5

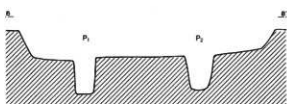
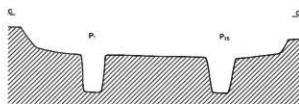
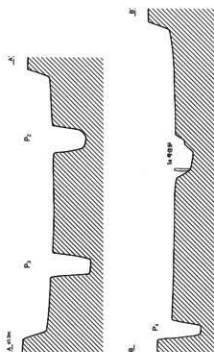
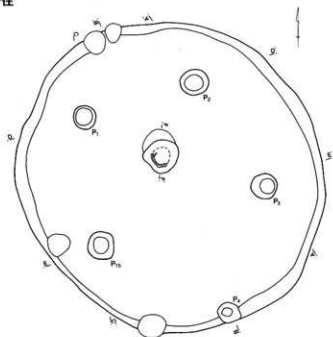
- 1 黒褐色土 ローム粒子を若干、焼土粒子・炭化物を少量含む。粘性に富み、しまりよし。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を多く、ロームブロック・焼土ブロックをごく少量含む。粘性に富み、しまりよし。
- 3 黒褐色土 ローム粒子を若干、ロームブロックを少量含む。粘性に富み、しまりよし。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多く含む、粘性に富み、固くしまっている。
- 5 黒褐色土 ローム粒子をやや多く、ロームブロックを少量含む。粘性に富み、しまりよし。
- 6 暗褐色土 大型のロームブロックを含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多量に含む、粘性に富み、固くしまる。

SJ5 PII

- 1 黒褐色土 黒色土をベースにロームブロックを含む。しまりなし。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを含む。しまりなし。
- 3 黄褐色土 ローム粒子。しまりなし。
- 4 黄褐色土 3層に近く、ロームブロックを含む。しまりなし。
- 5 暗褐色土 ロームブロックを含む。しまりよし。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを含む。しまりよし。
- 7 黄褐色土 ロームブロック。しまりよし。

第26図 第5a号住居跡

5a号住



5a号住炉跡

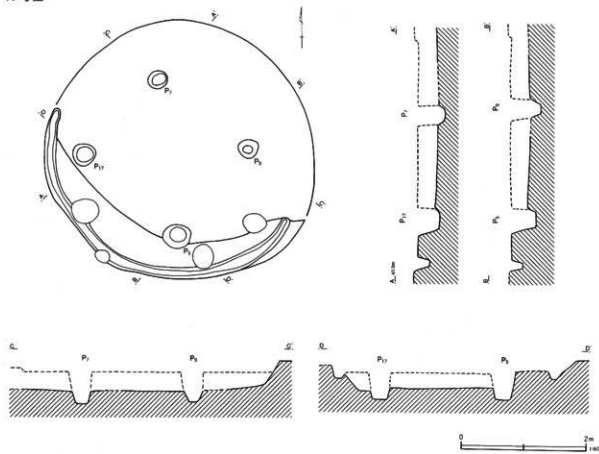


- 1 暗褐色土 焼嵩したロームブロック。小礫を含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子と炭化物粒子を少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を少量である。
- 4 黄褐色土 ローム粒子を多く含む。
- 5 暗褐色土 焼土ブロックを含み、ややしまりにかける。



第27図 第5b号住居跡

5b号住



=39cm、P 6=10cm、P 7=9 cm、P 8=14cm、P 9=19cm、P 10=21cm、P 11=8 cm、P 12=50cm、P 13=41cm、P 14=16cm、P 15=57cm、P 16=35cm、P 17=19cm、P 18=9 cm、P 19=12cm、P 20=7 cm、P 21=11cmである。

壁溝は2本検出され、両者の切り合い関係による新旧の判断は困難であったが、柱穴などの配置から新旧関係を掴み、第5b号住、第5c号住と認識した。

第5号住居跡からは大量の土器、石器が出土している(第29図～第46図)。所属を明確にできるのは各住居跡の炉体土器と、第5c号住居跡の直上から出土した一括土器である(第25図)。他は大半が第5c号住居跡覆土からの出土であるが、第5a号住居跡覆土出土遺物との区分が明確にし得ない状況であった。第5a号住居跡の遺物は、重複する第5c号住居跡との境界付近の覆土上層からの出土が多く認められるとい

う状況にあった。

第5a号住居跡(第26図)

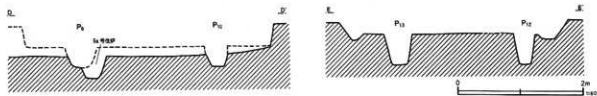
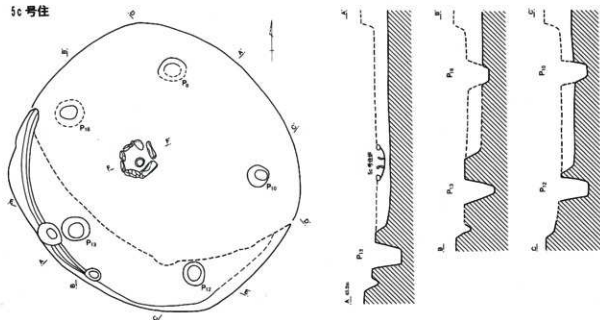
3軒の重複関係の中で最も古く、最も深い住居跡である。プランは北西方向にやや細長い楕円形を呈し、長径5.05m×短径4.67m×深さ0.65mを測る。柱穴はP 1、P 2、P 3、P 15の4本を主柱とする。P 4は入り口部のピットと思われる。床面は中央部がやや低くなるが平滑で、壁溝はない。壁はやや緩く立ち上がる。

炉は埋燬炉で、中央部やや北寄りに存在し、北側の半分が欠損する。これは、第5c号住居の柱穴によって覆乱されたものと判断される。

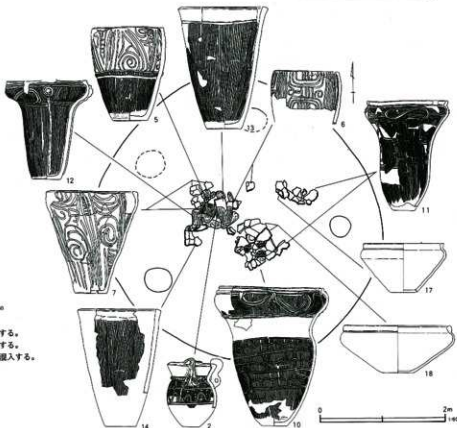
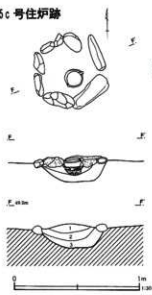
第29図1は第5a号住居の炉体土器である。口縁部と底部を欠損し、胴部の約半周が現存する。内彎して開く口縁部無文帯を持つ深鉢で、把手が付く可能性が高い。胴下半は縄文施文となり、緩い原体の単筋R Lを

第28図 第5c号住居跡

5c号住



5c号住炉跡



- 1 暗褐色土 層かにローム粒子を混入する。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを混入する。
- 3 黒褐色土 ローム粒子と粘土粒子を混入する。

やや間隔を開けて縦位施文する。文様帯は隆帯の縦区画を基準とし、円形文や派生する棘状モチーフを連結する構成で、その間隙に沈線のパネル状区画文を施し、連続爪形文を爪形文で縁取る蓮華状文を沿わせている。区画隆帯上には細かな刻みを施す。最大径30.8cm、現存高23.6cmを測る。勝坂式終末に比定されよう。

第36図19～30は第5a号住の炉内から出土した土器群である。19～22は円筒形深鉢の口縁部で、何れも口縁部に幅狭な無文帯を持つ。19、20は角頭状口唇、21は内端が突出する口唇、22はやや内削状口唇を呈し、隆帯の縦位区画内に沈線モチーフを描く。隆帯上には刻みを施し、21の口縁部には三日月形の隆帯文を施文する。20の区画内モチーフは、渦巻沈線文と三叉文を合体させたモチーフで、蛇体文を彷彿させる。

23は口縁部が内彎して開くキャリバー形深鉢で、口縁部文様帯に隆帯の三角区画を施す。隆帯上及び隆帯脇にはキャタピラ状の爪形文を施す。

24～30は胴部破片で、隆帯区画内に沈線区画を施すものである。沈線区画には25、27の様に蓮華状文を沿わせるものがあり、26は区画隆帯脇に小波状沈線と結節沈線文の両者を施文する。30は円筒形深鉢の胴部破片で、幅狭な隆帯の縦位区画内に、縦位展開のモチーフを施す。区画内は爪形文に縁取られた三叉文を縦位の玉抱き状モチーフにして施文し、余白に集合沈線を充填する構成を採る。以上、炉体土器内出土土器は多様なパネル状区画が施され、また、蓮華状文を多用する等、炉体土器と共通する要素を多く持つ。総じて、炉体土器と同時期である勝坂式終末期の様相をもつものと考えられる。

第5a号住居跡のP3出土土器は31、P15出土土器は39、40である。31は屈曲する底部付近の破片で、単節縄文LRを施文する。39は隆帯区画のみ認められる胴部破片で、40は底部破片である。

第36図44～60は第5a号住覆土から確実に出土した土器群である。44は内彎する無文口縁部の口唇上から隆帯が垂下する。45は内彎して開く口縁部に、沈線の三角文と爪形文や集合沈線文を施文する。46は外反

して開く無文の口縁部で、文様帯を隆帯で区画する。

47～60は胴部破片である。47は波状条線文と横位の爪形文列を施文する阿玉台系の土器で、皿式に比定されよう。48は爪形文に小波状沈線が沿う。

49～57は刻みを施す隆帯区画内に沈線区画を施すもので、56、57以外は隆帯上に刻みを施す。56は胴部の縄文地上にも平行沈線文のモチーフを描く。57は区画内にベン先状の集合結節沈線を充填施文する。

58、59は0段多条縄文RLの縦走縄文を施文する。60は胴部の沈線区画下に、細かな条線文を施文するものである。

以上、第5a号住居跡出土土器は、藤内式段階の土器群を若干含むものの、大半が井戸尻式段階で、勝坂式の終末の土器群のみ含まれていることが明らかであった。

第5b号住居跡（第27図）

住居跡のプランはほぼ円形を呈するものと思われ、推定長径4.29m×短径4.11m×深さ0.24mを測る。壁溝は全周し、P5、P7、P9、P17の4本を支柱にするものと思われる。

P9からの出土土器は第36図34で、無文の勝坂系土器と思われる。しかし、このビットが第5a号住と重複することから、混在の可能性が高い。

第5c号住居跡とはほぼ同一床面上での重複のため、炉は残存していない。土層の断面やビットの配置等から、第5b号住は第5a号住より新しく、第5c号住より古いことが明らかである。

第5c号住居跡（第28図）

住居跡のプランは、北西方向に若干細長い、隅丸方形の楕円形を呈するものと思われる。推定長径4.41m×短径4.17m×深さ0.24mを測る。壁溝は西側のコーナー付近のみ現存するが、本来は全周するものと思われる。柱穴はP8、P10、P12、P13、P18の5本支柱と推測され、P8は第5a号住の炉を壊している。

炉は石囲埋燵炉で、住居跡の中央部やや北西寄りに構築されている。石囲は一番手前に枕石上の大きな長

楕円の礫を敷き、それを基準に逆「ハ」字状に開く大形礫を設置し、奥脚にやや小さな円礫を弧状に組み合わせて構築している。埋塞は把手の部分、住居跡の主軸に対して直角方向に設置しており、石囲の中でもやや手前側の位置に設置している。

この炉の直上には、ほぼ完形土器3個体が横たわって出土しており、さらに周辺にも完形土器や大形破片が多数出土している。また、第5号住居出土土器の大半が第5c号住居土及び、第5a号住居上層より出土しており、第5c号住居の床面を明瞭に検出し得なかったことから、両者の区分は不明瞭にならざるを得なかった。

第5c号住居跡からの出土が明瞭な土器は、第29図2、第30図5、第31図6、7、8、第32図10、第33図11、第34図12、13、第35図17、18である。

2は第5c号住居跡の炉体土器である。底部を欠損するが、頸部で括れ、無文の口縁部が開き、口唇部内端が突出、胴部が球状に張る器形を呈する。頸部は押圧状の刻みを施す隆帯で区画し、口唇上から胴部まで垂下する眼鏡状把手を向かい合う2ヶ所に取り付ける。胴部文様帯は半載竹管の平行沈線で2帯に分割し、上段には把手下端を取り囲む弧状のモチーフを施文するが、1ヶ所垂直に垂下する平行沈線で表現する部分もある。下段は把手下部付近から垂下する平行沈線で2単位に区画し、区画線間に波状沈線を施文する。胴部の地文は、単筋Rの縦位施文である。口径14.8cm、現存高15cmを測る。勝坂系と加曾利E1式初頭段階に比定される。

5、12、13は炉体土器直上出土の3個体である。5は口縁部が内彎しながら開く樽形の器形で、胴中央部を隆帯で区画し、下半部を熱糸文地文とする。胴上半部は太い沈線2～4本で斜めに対向する三角区画文を8単位に、三角に割らない斜めの菱形文を1単位に区画し、合計9単位を区画する。区画内は渦巻文を中心とする文様と、曲線文を中心とする文様が交互に描かれる。上向き三角と下向き三角区画が2単位1組で同様なモチーフの繰り返しを描き、隣の2単位1組が逆のモチーフを繰り返す構成を採る。菱形区画を中心と

すれば2単位ずつが対向して逆のモチーフを描いていることになる。口縁部の一部を欠損するがほぼ完形で、口径21.8cm、底径8.4cm、器高27.8cmを測る。勝坂系であるが、単位構成等加曾利E系の要素を持ち、共伴形からも加曾利E1式初頭段階の勝坂系土器である。

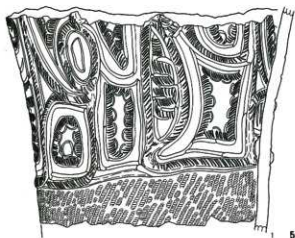
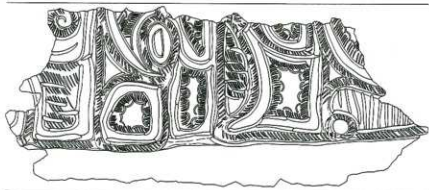
12は口縁部の屈曲の強いキャリバー形深鉢で、口縁部の把手部分を欠損するが、ほぼ完形である。口縁部区画、モチーフ等全て半載竹管の重複施文による平行沈線で描出する。描線は部分的に4本等になったりするが、基本は3本描出である。口縁部の2個の渦巻隆帯から2本の隆帯が垂下して器面を2分割し、口縁部文様帯区画内に横S字状文を2単位づつ施文する構成を採る。このS字状文は、上下の口縁部区画線へと連結されている。地文は口縁部から胴部にかけて、熱糸文Lを全面施文する。隆帯渦巻文の直上口縁部には、剥落痕が見られ、把手が突起が付けていたものと思われるが、渦巻文とは連結していない。口径24.5cm、底径8.5cm、器高29.2cmを測る。加曾利E1式初頭段階に比定される。

13は円筒形深鉢で、角頭状に肥厚する口縁部が緩く開く器形を呈する。口縁の無文部を太い沈線で区画するのみの土器で、器面全面に熱糸文Lを施文する。口縁の半分程を欠損するが、ほぼ完形で、推定口径27cm、底径10.5cm、器高36cmを測る。勝坂系の深鉢で、加曾利E1式段階に比定される。14も同様な土器で、大形破片からの復元であるが、推定口径25cm、現存高25.8cmを測る。

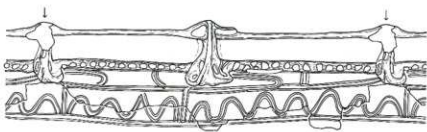
6～9は太沈線でモチーフを描出する勝坂系の土器群である。6は文様帯構成が9対把握されるもので、5と同様に樽形の器形を呈し、胴下半部を熱糸地文とする。胴上半部は4～5本の太沈線で4単位に縦位区画し、上下対向の対弧文を3本沈線で描く。対弧文内及び対弧間には主に縦位の集合沈線を施文するが、1ヶ所のみ渦巻文を施文する。また、区画の余白には、それぞれ異なったモチーフの渦巻文等を施文する。推定口径20cm、現存高15.6cmを測る。

7は全体の約半分程が現存する深鉢で、やや内彎す

第29图 第5号住居跡出土遺物 (1)



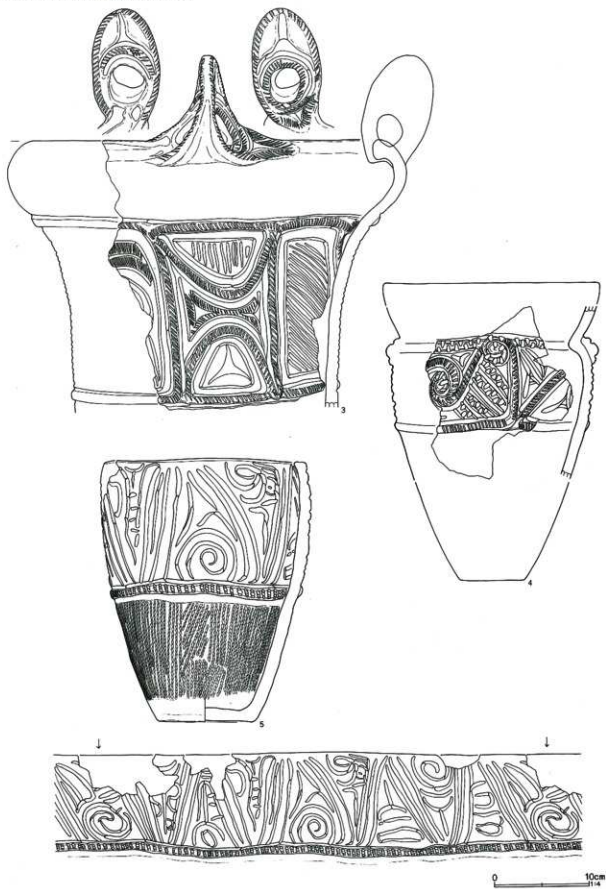
5a 号住炉体土器



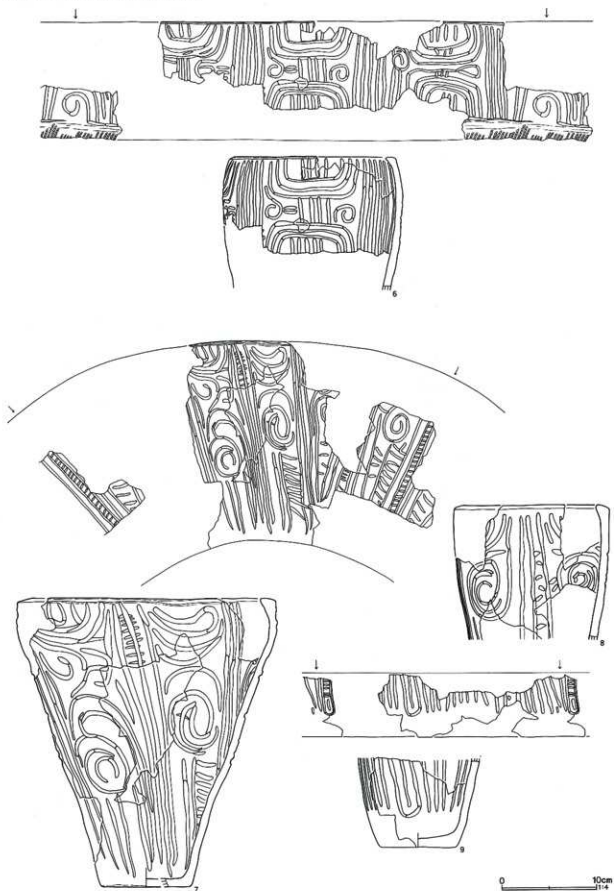
5c 号住炉体土器



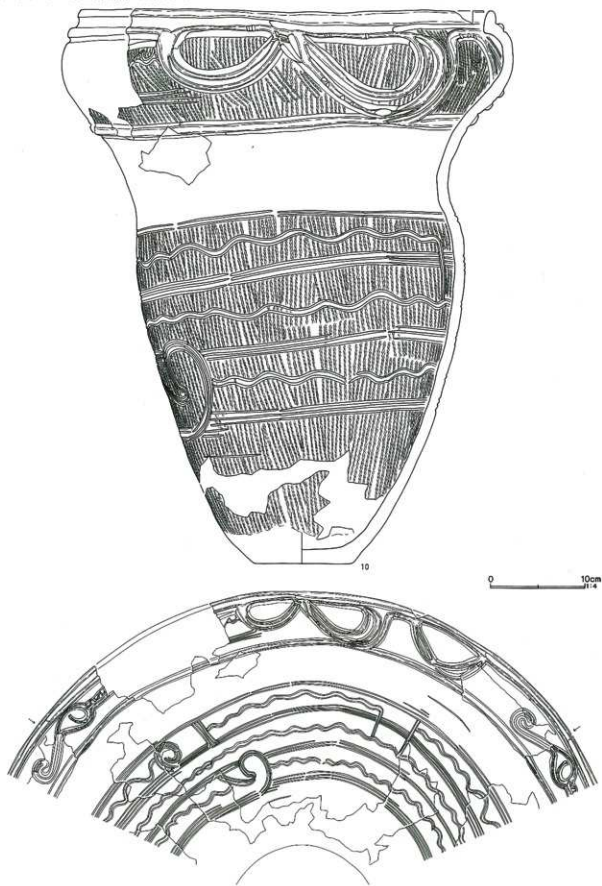
第30图 第5号住居跡出土遺物 (2)



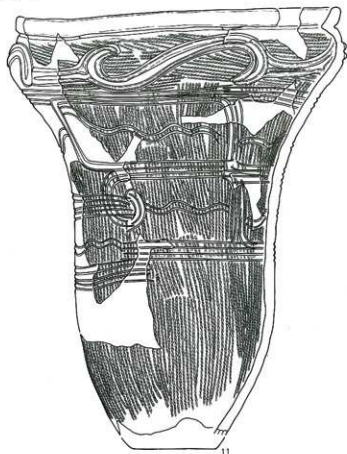
第31图 第5号住居跡出土遺物 (3)



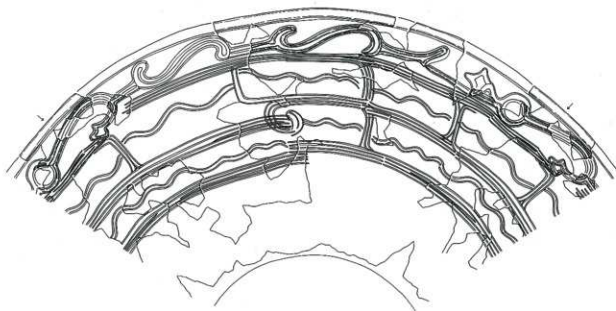
第32図 第5号住居跡出土遺物(4)



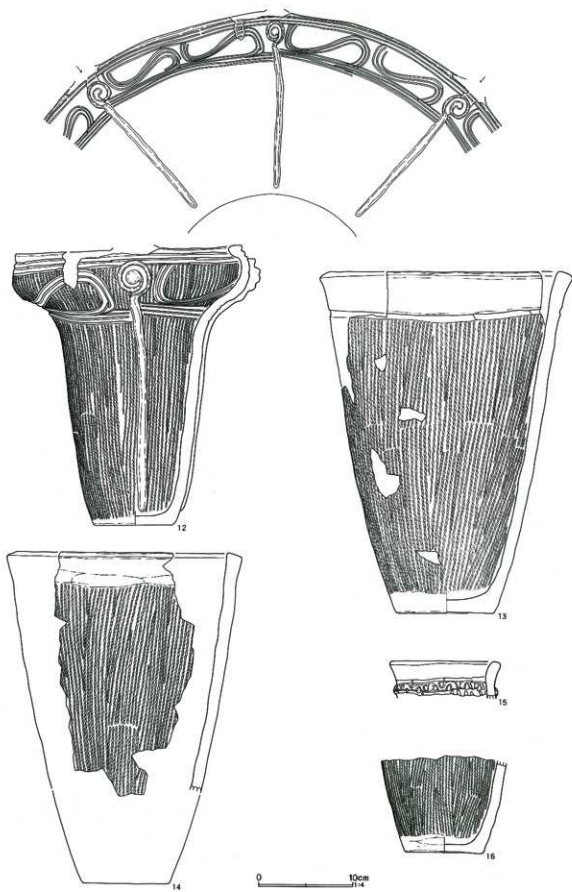
第33图 第5号住居跡出土遺物 (5)



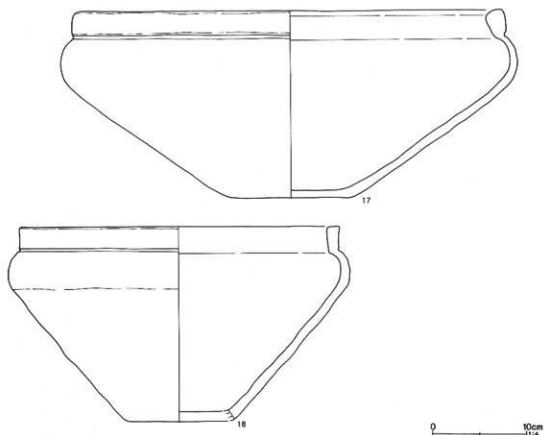
0 10cm 1/4



第34图 第5号住居跡出土遺物 (6)



第35図 第5号住居跡出土遺物 (7)



る口縁部が大きく開く器形を呈する。器面は3~4本の沈線で縦位に6分割し、区画内に渦巻文や変形した曲線文を縦位構成に施す。6単位のうち1単位分が欠損するが、モチーフ構成は5の構成に類似する。2本沈線間に梯子状の短沈線を施す構成が見られる。推定口径27.8cm、推定底径9.6cm、器高30.4cmを測る。

8は胴部の張りがやや緩い樽形を呈し、口唇部内端が突出する。沈線で器面を縦位に分割するものと思われるが、全体構成は不明である。区画内は縦位展開の渦巻文を基本とする。推定口径16.5cm、現存高14.5cmを測る。

9は底部破片で、太沈線文が垂下する構成を探るが、2本沈線の末端が連結する部分が2ヶ所あり、器面は2分割されていた可能性が窺えるが、間隔が不揃いで、3分割の可能性もある。推定底径9cm、現存高10cmを測る。

10、11は12同様各種の系統要素を持つが、加曾利E系の土器である。10は口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部文様帯構成のキャリバー形深鉢である。頸部で強く括れ、内彎の強い口縁部が大きく開く器形を呈する。口縁部文様帯は半円状の連結する弧状モチーフや、単独弧状モチーフ、横S字状の変形モチーフを施し、1ヶ所文様を欠損するが、4単位の単位文を施す構成を探る。この4単位の単位文は全て異なるモチーフの可能性が有る。区画隆帯や連結隆帯には、部分的に交互刺突文や刻みを施しており、モチーフは閉塞する2本隆帯で描いている。胴部は半截竹管の重複施文による平行沈線文で、横帯に3帯を区画する。横帯3帯は縦位の平行沈線文や、渦巻文等で区画し単位性を帯びる。横帯内には平行沈線の波状文を施すのが、縦位区画文から波状文が派生し、渦巻文と連結したり、帯間を超えてクランク状に垂下する部分もある。地文は撚糸文しを、口縁部と胴部に縦位施す。口縁部

から頸部にかけての器形と、弧状のモチーフは勝坂系の井戸尻式に見られる櫛形文土器の影響を、胴部の多段構成は勝坂式の、胴部のモチーフ構成や描出手法は大木系の要素を継承し、加曾利EⅠ式として統合されている土器である。加曾利EⅠ式成立期の土器である。口径44.5cm、底径10.5cm、器高14.6cmを測る。

11は口縁部文様帯と胴部文様帯を持つキャリバー形の深鉢で、底部と全体の約3分の1を欠損する。器形の括れは10と比較して緩やかであるが、口唇部が屈曲して開きながら立つ。口縁部文様帯内のみ隆帯でモチーフを描くが、胴部の区画及びモチーフは半截竹管の重複施文による平行沈線で描出する。口縁部文様帯は横S字状文+棘状派生文と横S字状文+円形文派生文が連結され、もう1ヶ所の単位文が欠損している。欠損部分に、間隔から判断して派生文を持つ単位文が入ることは無理であることから、横S字状文の様な単独の単位文を想定した。つまり、口縁部文様帯は大きくは3単位で構成され、派生文を1単位と捉えたと、5単位に構成されていることが理解される。勝坂式と加曾利E式の折衷的な単位構成となる。胴部は横帯の2帯に分割され、上段が頸部文様帯に相当する。頸部文様帯はクランク状の縦位区画線で楕円形の4区画に分割されるものと思われ、10と同様縦位区画線から波状沈線が派生する。胴部の横位分割線の一端からは渦巻文が派生しており、10の構成と類似する。横位分割線は器面を一周する間にずれが生じているが、上手に修正されている。地文は燃糸文Lを口縁部で、横位施文、胴部で縦位施文する。推定口径34.5cm、現存高44.8cmを測る。

15は口筒形深鉢の口縁部破片で、やや開く無文の口縁部を、交互刺突を施した隆帯で区画する。口径11.6cm、現存高3.8cmを測る。

16は燃糸文Lを施す底部破片で、底径8.4cm、現存高10.2cmを測る。

17、18は無文の浅鉢である。17は大形の扁平な浅鉢で、口縁部の「コ」字状屈曲は緩い。口縁の一部と胴部の約半分が現存し、推定口径45.6cm、推定底径

12.8cm、器高19.8cmを測る。18はやや器高の高い浅鉢で、口縁部の「コ」字状屈曲はやや強い。全体の約4分の1程が現存し、推定口径34.4cm、現存高20.5cmを測る。

第5号住出土土器(第30図3、4、第37図~第46図) 所属住居跡を明瞭にし得ない、第5号住居跡出土遺物を一括して説明する。

3は発掘時において第5c号住出土と認識されていたが、他の一括遺物より出土標高が若干低く、第5c号住の床面下の微妙なレベルに位置する。従って、第5a号住か第5c号住かの判断が難しく、第5号住居跡出土遺物として取り扱う。無文の口縁部が強く内彎して開くキャリバー形深鉢で、口縁部に把手が付く。把手は円形の透かしを持つ板状を呈し、両面に三叉文を中心にしたモチーフを施文する。把手の縁、及び透かしの縁に刻みを施し、刻みは爪形文と化して口唇上三叉文の縁取りへと繋がる。胴部は刻みを施す隆帯で縦位区画し、隆帯の対弧状モチーフや、沈線のパネル状区画文を施文する。区画内には三叉文や集合沈線を施文する。胴部は縄文、もしくは燃糸文を施文するものと思われる。約4分の1程を現存し、推定口径39cm、現存高38cmを測る。勝坂系土器である。

4は出土状況が3とほぼ同様で、明確な所属を判断し得ない。胴部の大形破片で、頸部で強く括れ、口縁部が内彎して開き、胴部が張る器形を呈すると思われる。文様帯は胴部上半の比較的狭い範囲に限られ、隆帯区画内に隆帯の渦巻連結文を施文する。余白には三叉文や、交互刺突文を施す平行沈線を施文する。他に、接合はしないが同一個体の隆帯文が数片出土している。現存高18.8cmを測る。

61~67は阿玉台系の土器群である。61は内彎して開く口縁部破片で、角頭状口唇部に刻みを施し、2列の角頭状結節沈線で楕円区画を描く。胎土に雲母を含む。62は口縁部破片で幅広い楕円隆帯区画に沿って2列の結節沈線を施し、区画内にも2列の結節沈線でモチーフを描く。隆帯上には幅広い爪形文状の刻みを施す。内面も口唇に沿って、2列の結節沈線を施す。胎土に